

第3章

地域の ESD をサポートする

<地域ネットワークプロジェクト>

地域ネットワークプロジェクト 2007 年度の活動

「地域で ESD 推進のしくみづくりのサポートをする」ことが地域 PT のミッションである。そのために 2007 年度は 2 つの目標を掲げた。①意欲的に ESD のしくみづくりに取り組んでいる地域と協働して ESD モデル地域づくりに取り組む、② ESD 推進の自治体ネットワークづくりに着手する。

①についてはなんとか試行錯誤的に方向性をだすことができた。②についてはうまくできていない。また、今年度は地域 PT としての動きができず、事務局と PT リーダー、サブリーダーによってなんとか活動をすすめることができた。来年度は、もっと多くの会員の参画によりチームとしての力を発揮したい。

2007 年度 活動の概要

(1) 地域の ESD モデルづくり協働事業

2006 年度にまとめた「ESD シナリオづくりワークショップ『3 回パッケージ・プログラム』(2007 年度事業名は「ESD 分野連携ワークショップ」とする)」を 3 地域で実践するとともに、新たに 2 地域で「プロセス抽出ワークショップ」を実施し、その成果を分析して「既存の学習に ESD を溶け込ませるプロセスの提案」(☞ 67 ページ) にまとめた。

前者は、歴史の浅いこれからネットワークづくりをしていこうという地域にむいている。後者は、市民と公共的学習支援機関（公民館、中間支援組織、NPO など）が協働して活動している地域で使われると効果を発揮すると思われる。

この 2 つの方法のちがいは、ESD を多様な〇〇教育のネットワークと理解して、そこから地域での異分野連携をつくりだしていくとするのが前者、持続可能な地域をつくりだすために コミュニティエンパワーメントと教育自治の力量としくみをつくりだす実践を深化させていくとするのが後者であるととらえることができるだろう。どちらも ESD の追求であることはまちがいないが、広がりと深まりの両方の実践が問われている。

(2) 地域の実践交流セミナー（全国ミーティング）

今年の全国ミーティングは、ESD の内容・方法を深めようという理事会の意向を受け、2 日目を研究会（5 時間）とした。また、会員による実践の自主発表の場（分科会）を設けた。

深めていくためのきっかけはつくれたが、いずれも時間が短い。もっと準備も必要である。

参加者は、全体で 200 名で、大学、研究者、企業等に広がりをみせている。過去に参加していた地域の実践者の参加が少ないのが気になる。後述する地域ワークショップで地域の実践者とのコミュニケーションを密にするとともに課題解決をはかり、その成果を来年の全国ミーティングに反映したい。

(3) ESD 推進の自治体ネットワークづくりの働きかけ

5 月に開催された環境自治体会議（愛媛県・内子町、約 60 自治体が参加）で呼びかけを行なったが、反応が得られなかった。別の方法を検討していきたい。

地域ネットワークプロジェクトチーム・リーダー 森 良



今後の活動の方向性

ESD の 10 年が開始されてから 4 年目を迎える今年度は、これまでの実践や経緯からくみとったエッセンスを「地域の ESD 実践ハンドブック」にまとめ、これから ESD をはじめようとする地域のサポートやすでに実践している地域の課題解決・発展のサポートに活用していきたい。

その実践のために、6～9 月にかけて全国 5 カ所（九州、中四国、東海、北陸、北海道）で地域ワークショップを開催したい。この地域ワークショップは、各地域の ESD の中心的な担い手の方々に集っていただき、各地域での ESD の拡大発展の課題や政府・自治体や地域の ESD-J からどんなサポートが必要かをだしあつて「地域の ESD 実践ハンドブック」を現場で役に立つものにしていくために行う。

この地域ワークショップのさいに、地域 PT も開催し、地域サポートの内容を検討していきたい。

プロセス抽出プロジェクト

プロセス抽出ワークショップとは

1. 背景とねらい

「国連持続可能な開発のための教育の 10 年 国際実施計画」の第 V 章、「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」の実施において示されている「7 つの戦略」の 1 つに「イノベーション」について触れられている項があります（☞『ESD-J 2005 年活動報告書』184 ページ）。

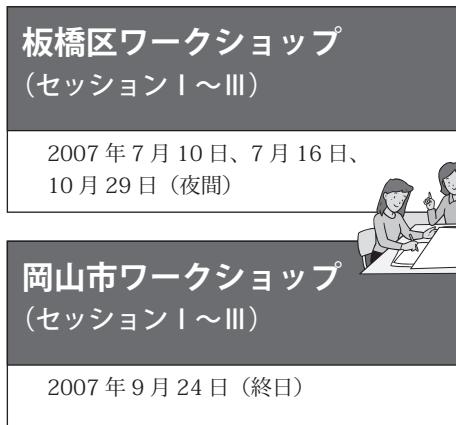
この項では、「ESD プログラムをコミュニティが創出するのに役立つプロセスは、既に数多く存在している」として、いくつかの具体的な既存の活動プロセスを紹介し、最後に「これらの既存のプロセスを地域文化の状況にあわせて発展させ、ESD プログラムに組み込むためには、イノベーションが必要である」と述べています。

ここからヒントを得て、わが国におけるさまざまな学習活動のなか、本年度はとりわけ市民の主体的な学びとそれを支援する公共的学習支援機関（公民館、学習支援の NPO、中間支援組織など）の相互作用による ESD 活動への発展プロセスに焦点をあて、ESD が組み込まれてきたイノベーションはなんであったのか、そのプロセスを分析することをねらいとしてワークショップを実施しました。

2. 実施概要

「プロセス抽出ワークショップ」は、東京都板橋区と岡山県岡山市京山地区の 2 カ所において開催し、2 都市のワークショップから得られた成果をとりまとめました。

その成果の一部は、第 19 回全国生涯学習フェスティバル「まなびピア岡山 2007」の参加事業「公民館サミット～地域づくりと ESD 推進～」の公開シンポジウムにおいて、「地域の ESD の発展における公共的学習支援機関の役割」というテーマで発表しました。



● 東京都板橋区ワークショップ

東京都板橋区ワークショップ実施概要

日時： 2007年7月10日、7月16日、10月29日

会場： みんなのセンターおむすび / かたぐるま（東京都板橋区板橋3-15-4）

参加者：（敬称略、順不同、20名）塩野、加藤、後藤、森、平野、園部、関谷、高田、海川、大湯、魚山、篠原、小塙、齋藤、的野、長谷川、佐藤、塩尻、河野、廣瀬

目的

1981年から20数年にわたり、地域に根づいた学習活動を展開している「NPO法人ボランティア市民活動推進センターいたばし」（以下、学習推進センターと略）とその活動の一つの場となった「大原社会教育会館」とのかかわり、ESDに発展していった活動の経緯を振りかえることで、ESDプログラムを創出したイノベーションがなにであったかを探ると同時に、学習の担い手にESDを意識化してもらうことを目的にワークショップを行いました。

進行プログラム

【セッションI】「ESDに取り組むまでのESD前史を振りかえる」

情報の
インプット

1 学習推進センター事務局長 加藤勉さんの話

1981年（板福連設立）から大原社会教育会館との協働、学習推進センター設立まで

2 大原社会教育会館指導主事 齋藤真哉さんの話

大原社会教育会館としての板橋の市民とのかかわりの歩み

参加者
への課題

Q1：学習がなぜ必要になってきたのか？

Q2：学習をどういう方法で行ってきたのか？（方法の変遷）

Q3：区や大原社会教育会館との協働はなぜはじまったのか、双方にとっての協働の必要性は？

Q4：社会教育会館（指導主事）は市民の学びの発展にどうかかわってきたか？

【セッションII】「2004年ESDの取組み開始から今までを振りかえる」

情報の
インプット

学習推進センター理事長 塩野敬祐さんの話

板橋でのESDの取組みと大原社会教育会館、総合ボランティアセンター、他団体とのかかわり

参加者
への課題

各自のタイムライン作成：

社会的な活動・学習をはじめてから今までを振りかえり、壁だったことや飛躍の契機などを

A3用紙に記入

【セッションIII】「I・IIの成果物を分析し、各自と全体での気づきを共有する」

情報共有

成果物の分析とその内容の共有

ワークショップ・話しあいの成果

これら参加者のもとで、下記の「4つの問い合わせ」を中心にお話しいました。

- 1 学習がなぜ必要になってきたのか？
- 2 学習をどういう方法で行ってきたのか？
- 3 板橋区や大原社会教育会館との協働はなぜはじめたのか？
- 4 社会教育主事は市民の学びの発展にどうかかわってきたか？



1 学習がなぜ必要になってきたのか？

学習推進センターの学びの推進力は、人類の共有財産と言える「国連」の提唱する思想・理念に共感し、その理念を学び深め広げたいという願望にあります。具体的には、1981年の国際障害者年、2001年の国際ボランティア年、そして、2005年のESDの10年の取組みです。

その思想・理念は全世界的なものであると同時に、常に個人の尊厳と平和を求める学習活動であったともいえます。

2 学習をどういう方法で行ってきたのか？

1981年の国際障害者年に発足した「板橋区ともに生きる福祉連絡会」を中心とする板橋の学びの特徴は、障がいをもつ人たちの課題を区民とともに共有すること、即ち「ともに生きる」を中心テーマに置くことがあります。具体的な活動としては、教育委員会と共同で中学生ボランティア講習会を20年間実施し、また40余の団体が参加して実施される「ふれあい祭」は25年の歩みを重ねています。このような実践的な学びと、その学びを地域で展開するうえにおいて、相互性・相乗性をもって「ともに生きる」という根本哲学は不可欠であると実感しています。

また、市民が主体的に学習活動をする動機として、身近な課題を解決しようとする指向性があげられます。板橋の学習運動には、この特徴が大きくあらわれています。それが、障がい者の人権、子どもの豊かな生きる力につながる学習です。こういった学習が、やがて障がい者や高齢者の防災（まちづくり）といった地域活動へと展開していきました。板橋では、常に市民一人ひとりの生きざまにかかわる学習を展開してきた歴史があります。

このような学習を追求するなかから、必然的に「ガンジーの平和学」「人権学」へと学びが発展していくのです。加えて、一人ひとりが板橋に暮らす者であると同時に、地球市民の一員である事の自覚が芽生え、さらにそのような問題の改善にむけた取組みへと結びつきました。

このように、学習推進センターには、常に人と社会の課題とむきあつた学習の歩みがあります。

3 板橋区や大原社会教育会館との協働はなぜはじめたのか？

板橋区との協働として、20年の歩みを重ねた中学生ボランティア講習会があります。ただ、この歩みのはじまりは、区民の側から提案し、運営実施してきたもので、区側からの働きかけで実現したものではありません。

ただし、大原社会教育会館との協働は、私たち区民の主体的な学びの歩みの積重ねがあり、一方で、大原社会教育会館の職員である斎藤氏の社会教育への熱い思いが具体的な出会いにつながっています。

よって、よりよき学びを実現したいとする「人と人」とのつながりが協働のはじまりといえます。

4 社会教育主事は市民の学びの発展にどうかかわってきたか？

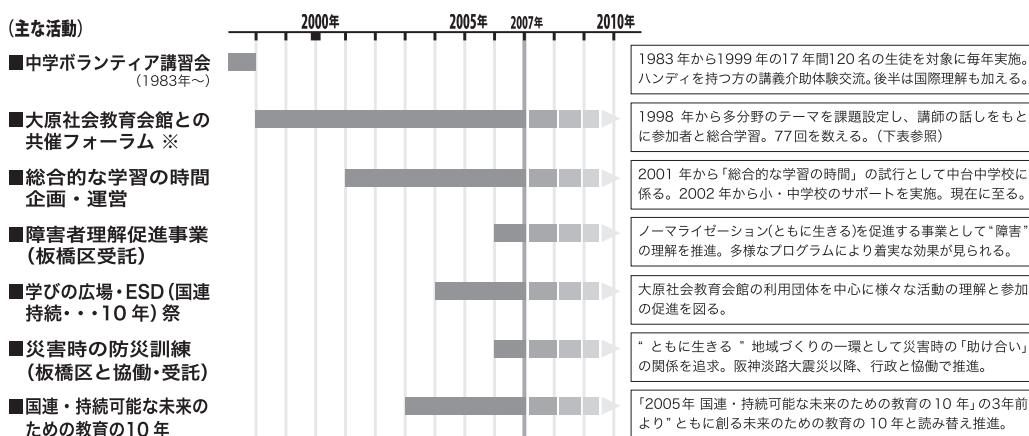
1998年から大原社会教育会館との共催フォーラムがはじまりました（下表）。企画運営は、私たち学習推進センターがすべて担い、推進してきました。このような共催関係にあって、社会教育主事が学習推進のなかでどのような役割を担ってきたかについていえば、一つには、学習推進におけるそのときどきの的確なアドバイスがあります。また、人権と平和を軸にした学びの追求については、一貫性があり、つねに理念に裏打ちされた不動の確信をもって併走してくれているといえます。かりに私たちの学習の歩みの中身が大切なものを多く含んでいるとしたら、本物をつねに指向する2人の教育主事が私たちに寄り添って共同作業をしてくれた成果であるともいえるのです。

ともあれ、学びの歩みは同時に葛藤の歩みであり、つねに市民の主体性と本気が問われているといえます。

（東京都板橋区ワークショップ報告：NPO法人ボランティア市民活動学習推進センターいたばし）

多様な学び（大原社会教育会館共催・77回のフォーラムの中から）

分野	回数	月日	テーマ
ボランティア	第1回	平成10年5月30日(土)	世界のみんなと手をつなごう～NGOで国際協力ボランティア
	第2回	平成10年7月25日(土)	ともに生きる社会とボランティア
福祉	第15回	平成13年2月10日(土)	介護保険制度の課題を考える～地域住民と行政の取り組みを学ぶ～
	第19回	平成13年7月4日(水)	老後の不安「万が一」を考える
子育て	第38回	平成14年9月29日(日)	子どもの好きな食品と健康を考える～食品添加物の実態をふまえて～
	第50回	平成15年9月3日(水)	かけがえのない子どもたちの命と未来をまもるために
人権	第18回	平成13年6月17日(日)	日々の暮らしの中にある「差別・偏見一心のバリア」を考える
	第27回	平成13年11月18日(日)	21世紀のジェンダーフリー社会とは
平和	第37回	平成14年8月24日(土)	「ガンジー」の足跡が語る「平和学」「人権学」「人間学」を考える
	第67回	平成17年3月16日(水)	民族の争いを乗り越えて人々がともに生きるには
まちづくり	第7回	平成11年12月5日(日)・23日(木)	街を歩いて「バリアフリー」を考える
	第42回	平成15年3月8日(土)	「祭」がまち(地域)を元気にする法則！
ESD	第44回	平成15年6月10日(火)	「国連・持続可能な未来(開発)のための教育の10年」に向けての相互学習
	第74回	平成18年12月2日(土)・3日(日)	持続可能な未来のための教育の10年の集い～遊ぼう 学ぼう おいでな祭～
教育(1)	第24回	平成13年9月29日(土)	「総合的な学習の時間」に投げかけられた課題を考える
	第48回	平成15年8月6日(水)	「総合的な学習の時間」で学校と地域の連携を考える
教育(2)	第34回	平成14年5月25日(土)	「総合的な学習の時間」で問われる「学びの豊かさ」、そして私たちの関わり
	第36回	平成14年7月16日(火)	あなたの出番です！～「総合的な学習の時間」にあなたの力を活かしてみませんか



「NPO法人ボランティア市民活動学習推進センターいたばし」とは

2001年、国際ボランティア年に発足。その母体は1981年の国際障害者年に発足した「板橋区ともに生きる福祉連絡会」（以下、「板福連」）で、地域活動の一環として中学生ボランティア講習会をおよそ20年にわたって提案・実施してきた歴史がある。この歩みを継続・発展させるために学習推進センターを新たに設立し、7年にわたり多様な分野・テーマの学習を重ねている。

板橋区には「成増」と「大原」に社会教育会館が2つある。学習推進センターは、そのうちの大原社会教育会館と協働して、具体的には①学校教育支援プロジェクト、②人権教育プロジェクト、③ノーマライゼーション教育プロジェクトといった活動を展開している。

また、気楽に集まる場として「ワイヤガヤサロン」を、毎月第3月曜日の午後7時から開催している。

ESDについての学習は2003年より重ねてきた。2008年にはESD記念行事として、「学びのネットワークの集い」を2008年4月26日に開催した。

参加者の意見・感想

ESD プロセス抽出ワークショップに参加して

NPO 法人 ボランティア市民活動学習推進センターいたばし 廣瀬 カズ子

今回の学習会を契機に“ESD”を自分自身の学習として落とすことができました。

では、なぜいまでは“ESD”をとらえられなかったのか。それは“ESD”を自分自身の生き方の課題として、学習の課題として、生活者の課題としてとらえようとしない自分に、今回気づいたのです。それは“ESD”は私からみるとどうしても“環境”に特化したものという固定観念があり、自分自身の活動からははるかに遠い分野という思いもあり、しっくりこない状況であったように思われます。

ところが、学習会に参加して“ESD”的身近さに気づきました。これに気づかせてくれたのが、“学び”というツールだったのです。“学び”によって福祉、平和、環境、経済、政治などなど、多くの分野がつながっていることに気づかされたのです。

2回目の学習会で自分自身の来し方をふりかえるワークショップをしましたが、自分自身の足跡のなかに“ESD”をしっかりと認識できたのはなによりの収穫となりました。“持続可能な開発のための……”という言葉に環境（開発）をイメージしてなかなかじめなかったのですが、今回自分自身の生き方のなかに“持続可能な……”を認識できたのは最大の収穫でありました。身構えての ESD ではなく、自分自身の生き方のなかで ESD を実感することに気づけたのは、この来し方（活動歴）がすでに ESD であったという実感を得たことでした。

子や孫の世代になにが残せるのか、なにを残したいのか——いま生きているわれわれの世代が真正面からむきあい、学習し、その学習成果をどうつなげていくかが問われる時代となりました。

希望ある社会にむけ、4月26日に板橋で当法人が主催する『学びのネットワークの集い！—希望に輝く未来の板橋を目指して—』が開催される運びです。多くの団体、個人とネットワークを結び、学びによって ESD がつながることを再確認する日となることは間違いないことでしょう。

板橋でのワークショップにおける気づき

NPO 法人 ボランティア市民活動学習推進センターいたばし理事長 塩野敬祐

「持続可能な社会のための学習活動」以前の30年間のボランティア活動は、真の幸福を得るために他者の苦しみを放置できないという感覚のもと、目前の非行少年の更生や障がい者問題の解決を対象としてきた。同じ活動対象をもつ仲間とともに、福祉のまちづくりを行ってきた。

その活動は、ESD のように、経済、文化、環境、社会などの全体関連性をもって世界を眺め、未来を予測するというものではなかった。ESD は気づかせてくれた。対症療法的な福祉のまちづくりで終わってはいけないことを。福祉のまちづくりで培った方法、すなわち、ともに生きる価値観の普及、住民参加の促進、協働のしくみづくりを堅持しつつ、視野を平和、環境保全、異文化交流、学校支援などへと拡大することを。

● 岡山市京山地区ワークショップ

岡山市京山地区ワークショップ実施概要

日 時： 2007年9月24日（月・休日）9：30～16：30

会 場： 岡山市立京山公民館（岡山市伊島町2-9-38 Tel/Fax 086-253-8302）

参 加 者：（敬称略、順不同、17名）池田、杉村、仲達、村岡、藤原、三宅、鬼木、片山、河合、今井、田中、井上、山根、守本、小延、森、後藤

目的

ESDの10年に先立ってESDの活動を推進している京山公民館を中心とした市民活動（京山地区ESD環境プロジェクト：KEEP [キープ]）のこれまでをふりかえり、学習の課題と発展の契機を抽出する。

進行プログラム

【セッションⅠ】「ESDに取り組むまでのESD前史をふりかえる」（1994～2004年）

話題
提供者

- 1 池田満之さん（岡山ユネスコ協会理事）の話
「京山のESDへつながる岡山でのユネスコ活動のふりかえり」
- 2 杉村洋子さん（京山公民館長）の話
「京山のESDへつながる岡山での公民館活動のふりかえり」

参加者
への課題

- カード書き（参加者が大切だと思ったことを記入）
- Q1：京山公民館でESDへつながる（学習）活動がなぜ必要となったのか？
- Q2：ESDへつながる（学習）活動をどういう方法で行ってきたのか？（方法の変遷）
- Q3：他の主体との連携のはじまりは？（NGO活動、公民館活動、学校、地域）
- Q4：そのなかで、京山公民館は、どのような役割を果たしたのか？
- ◎参加者が話題提供者からの話を聞いて考えること

【セッションⅡ】「2003ESDの取組み開始からいままでをふりかえる」（2003～2007年）

話題
提供者

- 3 仲達たえ子さん（京山ITサポート代表）の話
「学社連携・ESDの取組みにおける地域ボランティアの役割」
- 4 村岡鹿次さん（伊島学区コミュニティ協議会会長、伊福中町町内会長）の話
「ESDの取組みにおけるコミュニティ協議会、町内会の役割」
- 5 藤原利香さん（京山中学校教員）の話
「学社連携・ESDの取組みにおける中学校のかかわり方」
- 6 三宅貴久子さん（津島小学校教員）の話
「学社連携・ESDの取組みにおける小学校のかかわり方」

参加者
への課題

- カード書き（参加者が大切だと思ったことを記入）

共同作業

- 大きな年表の模造紙に、書かれたカードを整理して貼付け「京山ESDタイムライン」を作成（模造紙）……成果物1（☞64ページ）
- タイムラインを共有後、「私が取り組みたい課題」を各自だしてもらい、昼休み。

【セッションⅢ】「課題別グループ討論・全体討論・まとめ、公民館サミットにむけて」

課題別
グループ
討論

- ①リーダー育成・継続できるしくみづくり
 - ②連携・なかまづくり
 - ③学校・地域・地球をつなぐ

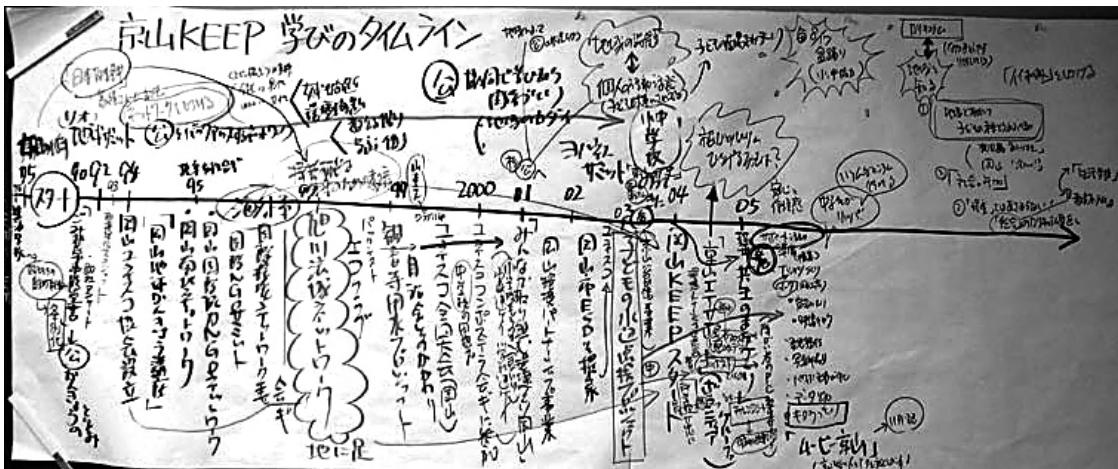
全体討論

結果の発表・共有(全体討論) ……成果物2(☞65ページ)

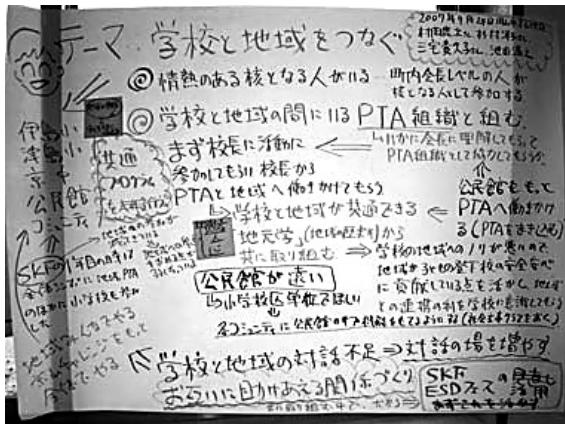
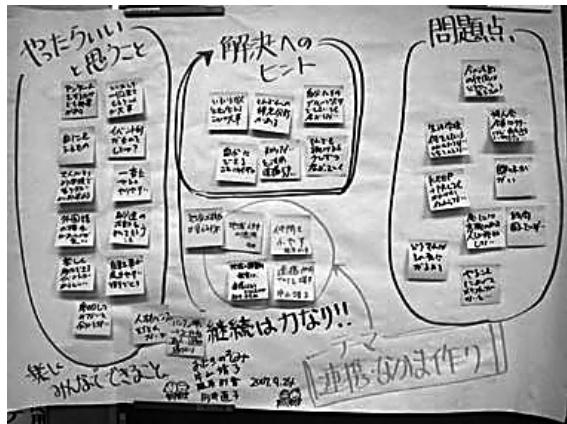
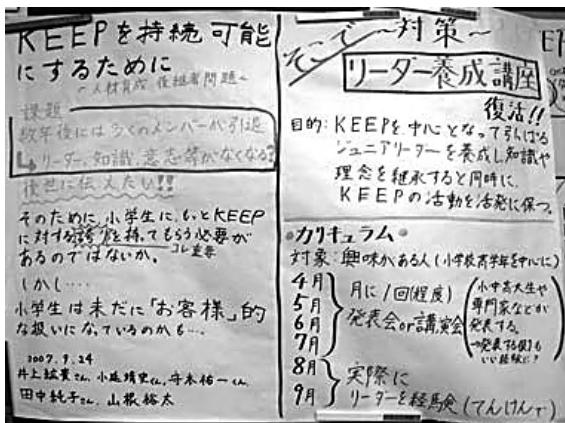
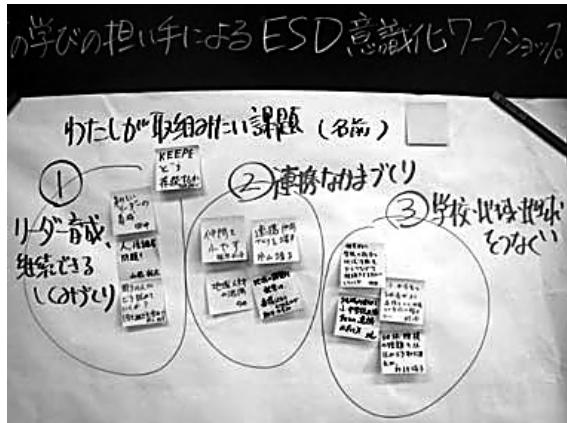


ワークショップ・話しあいの成果

成果物 1：「京山 ESD タイムライン」（セッション I、II）



成果物2 「課題別グループ討論」(セッションIII)



参加者の感想・意見

- 價値観がすごく変わった。
- みんなの変遷を知り、一步踏みだすと新しい発展があるのだなあと思った。
- 環境により暮らしがなにかを考えるうえで、「頭のよい暮らし」はヒントになると思った。
- みんながそれぞれの立場で、それなりに考えて動いているんだなあと実感した。若者の声をもっと聞きたいと思った。
- この活動において、学校、リーダーに対する期待がいかに大きいかを知った。
- 地域には、いろんな力をもっている人がいて、情熱がつながることで生まれ、世代を超えて活動が続いていることがすばらしいと思う。公民館の役割は大きい。
- 池田さん（リーダー）のような人の存在は、大事だったなあと思う。つなぎ役をつとめてくれた。次にどこまで自分たちが自主的主体的に一歩すすめられるかというところにかかっている。
- 計れない力、生きる力は説明しにくいけど、一人ひとりの成長、人に伝える（根拠をもって話す）教育活動として、この活動は非常に価値がある。
- 池田さんと出会い、地域交流をスタートした。ネットワークがつながっていく。次世代が育ってくれていてうれしい。

(岡山市京山地区ワークショップ報告：岡山市京山地区ESD推進協議会)

ワークショップの総括

岡山市京山地区 ESD 推進協議会会長 池田 満之

活動を何年も続けていると、次第に行事を行うことに追われ、活動本来の目的や目標があいまいになってきて、手段の目的化に陥ってしまいやすい。京山地区の ESD 活動においても、毎年、学生を中心にメンバーの入れ替わりが多いこともある、手段の目的化に近い傾向がでてきていた。

それゆえに、今回のワークショップで自分たちのこれまでの活動を振りかえり、共有し、いま抱えていられる課題を明らかにし、それについて討論できたことは大きい。とくに、いつものメンバーではあったが、外部コーディネーターを入れたことで、新鮮な気持ちで話しあうことができた。

今回のワークショップで、高校生たちが人材育成・後継者問題をいかに真剣にとらえ、どうすれば持続可能になるかを考えているかがわかった。中学生を育てるには、小学生にもっとこの活動に「誇り」をもってもらえるようにする必要があること、活動を引っ張るジュニアリーダーを養成し、知識や理念を継承すると同時に、活動を活発に保つことが大切で、そのために、実践を含めたリーダー養成講座を復活させることなど多くの意見がでた。また、学社連携をすすめるために、これまでにはかかわりが薄かった PTA 組織をもっと巻き込むことを決め、2007 年度の京山地区 ESD フェスティバルなどから実行することとなった。

このように今回のワークショップは、①活動を振りかえり、つねに自分たちはなにを目的に何がしたかったのかを見失わないようにすること、②外部コーディネーターなど、外の風を適宜入れることで、活動に新鮮さを失わないこと、③ばくぜんと気になっていたことをみんなで話しあうなかで明確にして、具体的な行動へと結びつけていくことなどの大切さを意識させてくれた。さらに、公的教育施設である公民館などを地域の知的拠点として活かし、ESD を推進する核としていくことが、長い目で継続的な活動をすすめていくうえで有効であることをあらためて実感した。一方で、何年にも渡って京山地区では地域で ESD に取り組んできたが、それでも中核メンバーですら、ESD をいまだにうまく理解しきれていない現状を再認識させられた。このことからも、ESD を地域全体でみなさん理解してもらいながらすすめていくことがいかにむずかしいかをあらためて考えさせられることになった。今後、地域に外の風をうまくとり入れながら、地域の ESD 活動をスパイラル的に促進していきたい。



2007 年 11 月 3 日 公民館サミット（発表）

既存の学習に
ESDを溶け込ませる
プロセス

「地域の学び」が発展してきた歴史から 学習戦略を抽出する

地域ネットワークプロジェクトチーム・リーダー 森 良

地域には、地域が抱える現実的な課題をテーマに、多様な主体が関係・協力しあいながら学習をすすめるといった ESD 的な学習や活動が、すでにたくさん存在しています。それらの学習を構築してきたプロセス（歴史）に注目し、個人、集団、地域社会での学習の結びつきや発展のきっかけ、その媒介となったもの（つなぐもの、促進するもの）などを抽出することにより、既存の学習に ESD を溶け込ませるための普遍的な方法がみいだせるのではないか。ESD-J は、そのような考えに立ち「既存の学習に ESD を溶け込ませるプロセス抽出ワークショップ」を実施し、その結果を分析して「既存の学習に ESD を溶け込ませるプロセスの提案」を導きだしました。その経緯と「提案」を紹介します。

▶ ESD を溶け込ませるプロセスとは……

ユネスコが作成した「ESD 国際実施計画」（2005 年 10 月）には、「ESD プログラムをコミュニティが創出するのに役立つ『プロセス』はすでに数多く存在している」と書かれています。

そして、ESD の革新を育む手段として、これらのプロセスを地域の状況に応じて修正し、活用することができる示し、その例として、次のようなものが挙げられています。

- 世界各地のコミュニティにおける「ローカルアジェンダ 21」の策定を手助けするために ICLEI（国際持続可能性自治体協議会）が採用しているような、コミュニティにおける持続可能な開発の目標を明確化するためのプロセス
- 「持続可能な開発のための教育のツールキット」で採用されているような、地方に根ざし文化的にも適切な形態での持続可能性に取り組むために教育の再構築を行うためのプロセス
- ユネスコのウェブサイトに掲載されている「持続可能な未来のための教授と学習」で採用されているような、実行可能な教授法
- 「国連水の 10 年」で用いられている環境変化のモニタリング活動などのよう、学習の場（学校や成人教育プログラムなど）とコミュニティの連携を促進する方法
- その土地固有で、伝統的な、地方に根ざした知識や文化を、ESD プログラムに盛り込むための市民参加のプロセス
- 長年にわたりイノベーションを行い、異なる状況下で有益なサービスを提供してきた、世界各地の環境、保健、平和、経済、人権、開発に関する教育のネットワークから学んでまとめあげられたプロセス

このように具体的に示されれば、「ああ、これだったら自分たちのやっていることに近い」と思われる方も多いと思います。地域の環境調査、社会調査は至るところで行われています。問題は、それが自然やコミュニティを壊す持続不可能な開発のために使われてきたということにあります。だから、持続可能な開発という明確な基準を地域の人びとが自分たちで明らかにし、とらえることが必要なのです。

►このプロジェクトの実施方法

公民館などの公共的学習支援機関とともに活発な ESD 活動を展開している地域の協力を得て、前記 b.d.e. につながるプロセスを抽出することを目的としたワークショップを行いました。

ワークショップの実施地域として、東京都板橋区と岡山県岡山市京山地区の 2 地域に協力いただきました。いずれも地域の多様な主体が公共的学習支援機関と連携し、ESD を実践しているパワフルな地域です。

ワークショップは、市民側のリーダー、公民館職員（社会教育主事など）、学校の教員などのそれぞれの地域のキーパーソンから、以下の 4 つの質問をポイントに地域の学びが発展してきた歴史を語ってもらい、参加メンバー（現在の学びの担い手たち）からその話をきいて重要だと思ったことをだしあい、それを模造紙を 2 枚横につなげた学びのタイムラインにはりだしていくという方法で行われました。

Q1：学習がなぜ必要になってきたのか

Q2：学習をどういう方法で行ってきたのか

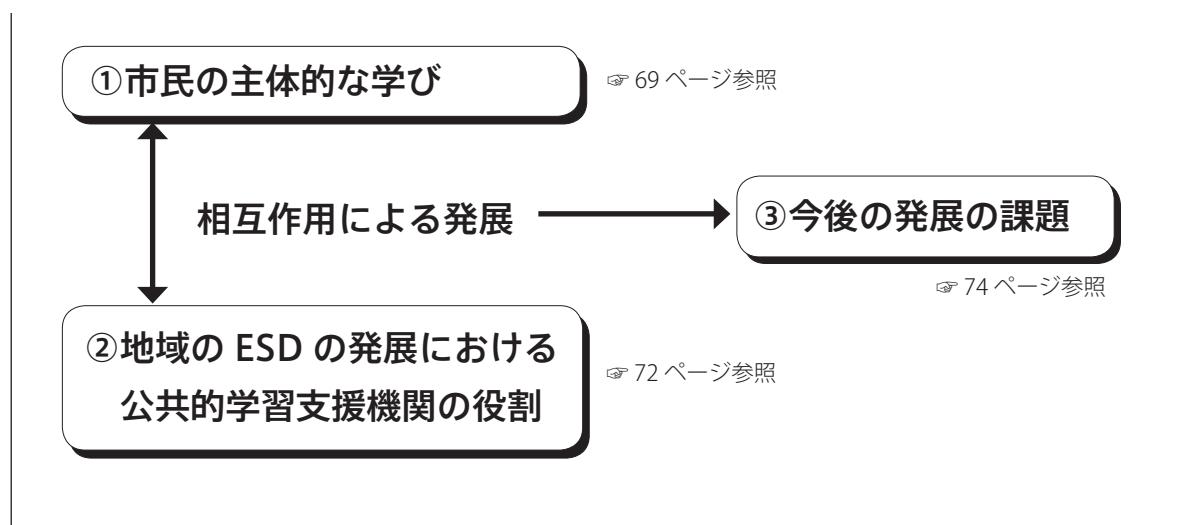
Q3：公民館（社会教育会館）との協働はなぜはじまったのか、双方にとって協働の必要性はなにか

Q4：公民館職員（社会教育主事）は市民の学びの発展にどうかかわってきたのか

板橋、岡山 2 つの学びのタイムラインを分析してでてきたのが以下の①～③の「既存の学習に ESD を溶け込ませるプロセスの提案」です。

►既存の学習に ESD を溶け込ませるプロセスの提案

〈提案の構成〉



1 市民の主体的な学び

(1) 市民活動は学習によって広がり深まる

ボランティアは、やむにやまれない気持ちが吹きだして自ら動く人（個人）を指しています。NPOは市民公益活動を行う組織であり、個別の課題の解決にとどまらず、市民的自由を実現し市民社会をつくっていくことをめざしています。

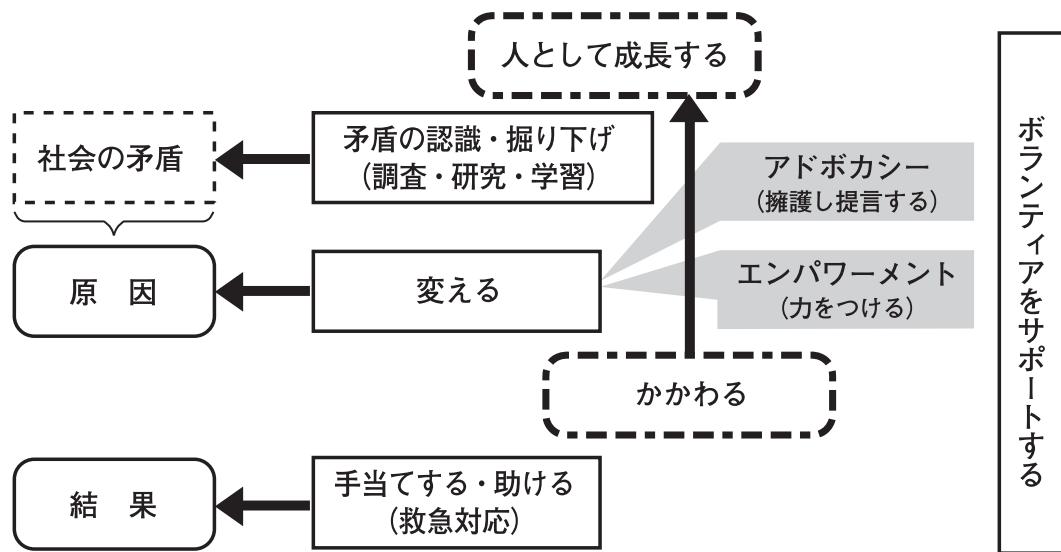


図1 ボランティアのあり方の多様性

ボランティアのいろいろなあり方と意味を図で分析してみましょう。図1の□の部分がボランティアのかかわり方を指しています。じつに多様なかかわり方がありますが、共通していることは〈かかわることによって成長する〉ということであり、これこそボランティアの意味です。また、社会の課題の原因となっている矛盾の認識やそれを掘り下げるこなしに問題の真の解決や市民社会の創造はありません。

つまり市民活動は、学びによって成長し社会のビジョンを描くことができるようになります。その学習の輪のなかに、小中学生、高校生、大学生や住民などさまざまな人が入ることによって、活動やそのめざすものも広がっていきます。つまり、市民活動の発展にとって「学習の意識化」はなくてはならないものになっているのです。

(2) 国連と世界のNGOがグローバルな課題や理念を提起した

ESDで学ぶべき基本概念としては次のようなものがあげられますが、これは第2次世界大戦後の歴史のなかで、国連やNGOが提案し練りあげってきたものです。

- | | | |
|---------------|-------------------|-------------|
| ・生物の多様性 | ・社会や文化の多様性 | ・循環と相互依存 |
| ・一人ひとりの人権の尊重 | ・ジェンダー平等 | ・ノーマライゼーション |
| ・市民権（シチズンシップ） | ・異なる価値観・宗教間の寛容と共存 | ・世代内の公正 |
| ・世代間の公正 | ・種間の公正 | ・参加と変革 |

これらの基本概念が練りあげられる過程では、さまざまな対立や闘いがありましたが、政府間の世界会議と市民代表（NGO）の世界会議が同時進行で開催されるというルールが確立されたのは、1992年の地球サミット（国連環境開発会議）以来です。

CO₂削減目標をめぐるアメリカ政府の一貫した消極的な対応にみられるように、産業界の利害に左右されることの多い政府間会議の動向に対して、提言し監視するというNGOの果たす役割はきわめて重要です（図1の「アドボカシー」にあたる）。

上記のような基本概念は、人類の経験や知恵の蓄積を理念化するなかから得られてきました。東京都板橋区でESDを地域密着型で推進しているNPO法人ボランティア市民活動学習推進センターいたばし事務局長の加藤勉さんは、こうした理念を共有化し、地域の課題を理念とつないでいくことが大事だと考えています。

(3) コミュニティ組織や多様な住民との連携による地域課題の掘り下げ

そのためには地域の課題がなんであるのかをよく知らなくてはなりません。その方法が市民による「実態調査」です。

板橋ではこれまでこんな調査をやってきました（主体は板福連：板橋共に生きる福祉連絡会）。

- ・ 障がい者の自立「地域生活志向調査」
 - ・ 災害時の助けあいにかかわる調査…… 町内会、自治会ヒアリング
自力で避難できない当事者と家族対象
 - ・ 障がい者の地域生活課題調査（1200人）
 - ・ 区内全公園・全学校のバリアフリー調査

調査の重要な意味は、学習（現実を知る）を行動（現実を変える）に結びつけるものだということです。その調査の対象になった人びとも当事者・関係者として大きな影響を受けます。

板橋では、ノーマライゼーションという国際障害者年の理念を学び、地域の実態を調査し、ニーズを掘り起こし活動を展開してきました。そのなかで社会教育会館との協働がはじまり、福祉分野以外の市民との出会いや相互学習、参加型学習の方法を得るなどの学びの発展があつたのです。

現在、意識されている課題は2つあります。1つは、自治の教育に関する提言をだすこと、もう1つは、コミュニティの多様な主体が一同に会して相互の理解にもとづく討議の場をつくりだすことが必要だということです。

(4) 市民活動はまちづくりへと発展する

あらゆる市民活動はまちづくり（持続可能な地域づくり）へと発展する可能性をもっています。そのことを示す一つの例を見てみましょう。

2008年4月26日、板橋で「板橋・学びのネットワークの集い」が開かれました。その構成がおもしろいのです。

- ・環境（地球温暖化防止）
 - ・保健・福祉・医療（ノーマライゼーション）
 - ・多文化共生（希望社会を私たちの手で）
 - ・教育（生きる力・人権・平和）
 - ・地域・自治（参加・協働・支え合い）

これを図に構成してみると

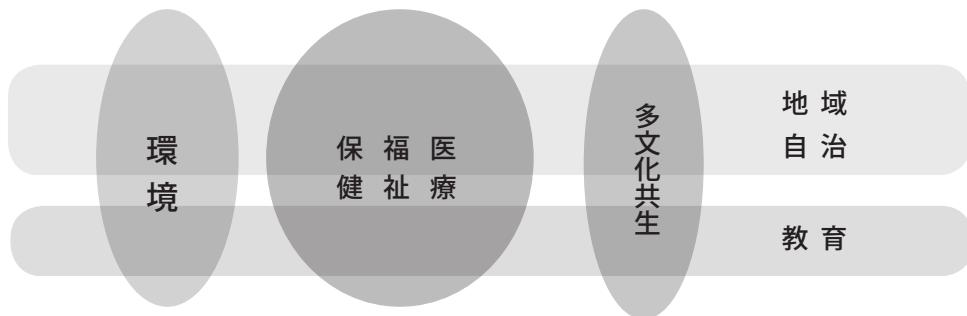


図2 地域課題と教育・自治

このようになるでしょう。環境と保健・福祉・医療と多文化共生というテーマ（地域課題）を地域・自治によってまとめあげ実践していきましょう、そしてその基盤になる力を生みだすのが教育ですよということをこの図は意味しています。

いままではこれがバラバラに取り組まれてきたわけですが、「希望ある未来を創るために豊かな学びのネットワークを」という呼びかけにより結びあわされようとしています。

この学びのネットワークをもとに、「板橋学習」という郷土未来学習（過去—現在—未来の視点で郷土を学ぶ）も展開されようとしています。

持続可能な地域は、FEC（F:Food、E:Energy、C:Care）の地域自給によってもたらされますが、それは、市民参加と多様な主体の協働、そして市民自治によってもたらされるのです。

(5) 地球市民としての学びと行動

グローバルな課題は足元にあります。東京と新宿区では10人に1人が外国人であり、クラスは完全に多文化化しています。子どもたちの親は、日本語が話せない人が多く、日本の地域コミュニティに溶け込んでいません。

国際理解とは外のことではありません。多文化化している地域、多文化化しているクラス、一人ひとりの子どもたちこそが教材です。

そう考えると、ごみだしや地域清掃という環境とコミュニティ、人権、多文化共生、識字が結びついてきます。新宿区大久保という地域のなかの1人の在日外国人の存在と生活を「共生するコミュニティ」という価値の光で照らしたときに、そこにESDの学びが浮かびあがります。

足元の課題と地球の課題をつなげていくことにより豊かな世界をつくることができるようになります。また、現在は未来の先どりです。いま、ここでの関係づくりが、持続可能な社会をもたらすのです。私たちは、自然界のつながり（生態系）と地球社会のつながり（国際関係、社会関係、人間関係など）の大きな2つのつながりによって生かされています。このつながりに気づき、つながりを築くことが大切です。よいつながりは発展させていかなければならないし、悪いつながりは断ち切りつなぎ直していく必要があります。

そのときに大切なのが、市民性（シチズンシップ）という立脚点です。市民とは、地域と地球に責任を持つ存在です。変化する社会の課題、地域と地球、人間の課題についてつなげて敏感であり、学び、話しあい、課題解決にむけて行動する人間です。

2 地域の ESD の発展における公共的学習支援機関の役割についての提案

あなたのまちにも、公民館、学習を支援する NPO、中間支援組織（ボランティア・市民活動を支援する組織）などがあると思います。そこでは、さまざまな講座や学習活動が行われています。そこで大事なことは、市民が主体となって、地域や世界の課題をとりあげ、その課題を解決する行動につなげていくことであり、持続可能な地域づくりに発展させていくことです。

そのためには、市民の主体的な学びに加えて、それを支援する公共的学習支援機関の果たす役割が重要になります。ここでは、その役割の内容について提案します。

提案 1 課題を投げかける、共有する

公民館や中間支援組織に集っているさまざまな市民団体は、個別のテーマを掲げた学習や活動をしていることが多く、同じ地域で活動しているにもかかわらず、市民活動自体が行政のタテ割りの組織に連動して、タテ割り化しバラバラになりがちです。

そこで、公共的学習支援機関は、行政と市民が協働して学習活動を担う新しい公共、普遍的な公共といった視点から、上記のような傾向にある学習者に対して、共通の地域課題やグローバルな課題について問題提起し、共有化を促していく必要があります。

地域課題を解決していくうえでは、地域の自治力の形成が決定的に重要であり、個別テーマの追求はそこにつながっていく必要があるからです。

提案 2 出合いをつくる

課題を共有したり、解決していくうえでは、異質なものの出会いをつくりだすことが大切です。自分たち以外の学びや活動との出会いは、団体間、異分野間の連携を促進し、まちづくりのネットワークをひろげます。

また、世代を超えた学びの場をつくることによって、世代間交流や連携がすすみ、地域の知恵や文化・民俗の伝承、相互の学びあいをはかることができます。

提案 3 個人と地域をつなぐ

旧来の地域コミュニティが崩壊し、ライフスタイルの個人化がすすむなかで、地域の市民は分子化して砂粒のようにバラバラになっています。しかし、公民館や中間支援組織に集っている団体のみならず、社会や地域の問題に関心をもち、かかわっていきたいと考えている個人は多いのです。

そこで、公共的学習支援機関は、団体だけを相手にするのではなく、これらの関心をもつ個人の学びや活動のサポートに力を入れていく必要があります。それらの人びとに、地域のなかでの自らの役割をみいだしてもらうことができるなら、意欲ある個人の活躍の場が広がっていくでしょう。

NPO はボランティア（自発的に活動する個人）に支えられて活動を広げ発展させることができます。逆に NPO の働きなしには、ボランティアは行政のお手伝いになりがちです。NPO とボランティアのネットワークづくりをサポートすることは、地域の市民活動の発展に不可欠の仕事です。

地域と学校の連携を発展させていくうえでも、ボランティアの役割は大切です。学校の内外で現代的社会的な課題について学んでいくためには、専門的な知識やスキル（IT、映像など）をもったボランティアの協力が必要です。公共的学習支援機関は、そのコーディネートをする役割をもちます。

提案4 学び方を学ぶ

探究型、問題解決型の学びは一方通行型、講義型の学習方法だけでは成し得ません。相互学習、参加型学習の方法が必要です。それらは研修のテーマであるというよりも日常的な学びのスタイルであるといえます。

相互学習は日本の公民館の特徴の一つです。「公民館は教育機関とはいへ、情報、知識あるいは職業技術のようなスキルを身につけるということは少なく、むしろ、人々の交流によって得られる知恵や知識の獲得に特徴がある」(全国公民館連合会「The Kominkan」より)

参加型学習は、自分の経験をとおして知識や世界観を再構成していく学習です。市民が現実の課題に直面したときに、課題をとらえ、整理し、分析し、計画をつくり、実行し、評価してまた実行するという課題解決のプロセスそのものが学習のプロセスなのです。

公共的学習支援機関は、実際の課題に即して、市民に学習方法を伝えていく役割があります。お腹がすいた人に魚をあげるのではなく、魚の釣り方を教えるのです。与えるのではなく、自立を支援することこそ公共的学習支援機関の使命です。

提案5 世界との具体的なつながりをつくる

公共的学習支援機関は、地域の人びとに対して「世界をみつめ地域に生きる」ことを伝えていかなくてはなりません。

環境、開発、人権、平和、ジェンダー、健康などのグローバルな課題はすべて私たちの足元に具体的に存在するのです。地域の問題が世界の問題とつながっていることに気づかせ、世界とつながる地域づくりをしていくことを繰り返し示すことが求められています。

国連が提起する理念（たとえば、市民権、ノーマライゼーション、ジェンダー平等、持続可能な開発など）を地域の人びとと共有し、理念と地域の課題とを結びつけていくことが大切です。

提案6 媒介（コーディネート、促進）する 【コーディネーターの役割】

提案1から提案5までの役割を果たしていくには、学習を媒介する人が必要です。ただ建物だけあってもそれは学習支援機関とは呼べません。学習をコーディネートする人が必要です。それは、社会教育主事や社会教育指導員、あるいは学習支援のNPOスタッフによって担われていますが、まだまだ足りません。この強化が地域の学習を発展させるために決定的に重要です。

コーディネーターの役割には次のようなものがあります。

- 1) **学習の援助**：課題や質問を投げかけることにより学習を促進します。
- 2) **企画・運営の支援**：市民が企画・運営することをサポートします。
- 3) **企画案の具現化**：市民活動をしている人びとは、えてして「思い」に傾きがちで「伝える」ことに慣れていません。思いは形になり伝わらなければ広がらないので、形にする方法や伝える方法を教えます。
- 4) **ネットワーク**：ネットワーキングをサポートします。
- 5) **聴取・記録**：学習を継続・継承し、地域外からの評価、提案、アドバイスを受けていくためには、学習者から聞きとり、記録を残していく必要があります。

提案7 足かせにもなる⇒役割分担・連携をはかる

たとえば、ある学習講座を受けた団体や個人が、そこで学んだことを「活動や運動」に発展させていきたいと思っても、公民館など行政機関の場合には、「公平性の原則」があり、特定のグループや活動に肩入れすることはできないという制約があり、それが市民活動の発展の足かせにもなります。

そういう場合は、NPOの自主性と機動性を活かして、行政ができない部分を担っていけばいいのです。また、より活動に近い部分は中間支援組織にまかせるなどの役割分担をすることによって、学習から活動への発展をスムーズに促進できます。

3 今後の発展の課題

A.一般的な課題

(1) 人生をつくり社会に参加する力につける（ESD の土台）

人間の学びは、そのはじめから文脈的・参加的・包括的であることが人間的・市民的成熟の土台をつくります。世界や社会を読み解き、知識や技能を柔軟に活用し、社会に参加することをエンパワードするという学習観が ESD の土台をなします。学校教育も社会教育もすべての学びの担い手に、この学習観への転換の機会を提供するようにすべきです。

(2) 学びの総合化（持続可能な地域と地球をつくる）

分野やテーマで細分化された学習や活動から、総合学習・まちづくり・持続可能性（経済・社会・環境の統合）といった視点での学びの総合化を意識すべきです。それは、地域の持続可能性(FEC の自給率や市民参加度、環境容量など)についての探究や地球の持続可能性についての学習によってもたらされます。

(3) 学びの国際化・民際化

地球市民としての学びと行動は、異分野、異文化の人びとの協働によってもたらされます。たとえば、気仙沼地域の学校では日本と外国の学校が共通の目標を設定し、学習の成果をインターネットや TV 会議などで共有し、環境や文化の多様性と問題解決の共通性を学びあっています。表面的な交流から学びの交流へと深化させることが大切です。

(4) 学習方法の深化と拡張

参加型の学習をコミュニティのさまざまな主体が共同で行う学習（拡張的学習）に深化させましょう。拡張的学習とは、ある人格が具体的な困難、葛藤に直面し、それを多様な角度から語り合い、そこから社会や経済システムにおける構造的矛盾の解明や変革を志向するものです。そのとき大切なことは、シミュレーションを避け、徹底的な現場主義に立たねばならないということです。この学習を発展させるために必要なのが、介入者の方法論です。介入者は、学習のサイクルを前進させ、媒介し、記録し、分析します。

(5) 持続可能な地域と地球を担う主体をつくる

学習における学習者の主体性が増せば増すほど、活動は社会的になっていきます。ある問題について学び、

調査、研究することはその問題の解決につながっていきます（アクション・リサーチ）。学習者の主体性を増大させる働きかけが重要です。

B. 地域での具体的な課題

(1) 地域の共通の理念をつくり目標を共有する

1- (☞ 69 ページ) あげた ESD の基本概念を地域性や状況に応じて地域の共通理念へと鍛えあげて、その地域での ESD の理念と目標を共有しましょう。

板橋では、ノーマライゼーションという理念を「ともに生きる」（まちのなかで、地域とともに生きる）ことの実践としてとらえて、バリアフリー（心と物の障壁をとりのぞく）活動を展開してきました。人間が人間らしく生きることができる権利、人権の実現と行使と実現にかかる市民の運動（板福連）があり、大原社会教育会館はそれを教育の面から支援してきました。

岡山市京山地区では、川の環境教育を始点としながらも、大人も子どもも「誰かの役に立ちたい」「思いを受け止めてほしい」という欲求を満たすことができず、「生きづらさ」という人間の持続可能性という問題に直面しました。子どもたちが企画段階から参画し、お互いに相手を一人の人間として尊重しあうなかで、人間の持続可能性の課題が解決されてきました。そのことが参加者のエンパワーメント、つまり自信や自己の確立、活動参加への喜び、生きる喜び、自己と自分につながる人びとの尊重、地域への愛情につながっていました。

こうした例からもうかがえるように、「共生するコミュニティ」やそれを支える「市民自治」、そのための「自治の教育」といったことが地域での理念や目標を検討するカギになるでしょう。

(2) 目標にむけた課題解決のプロセスを学習カリキュラム化する

これまで地域に ESD 的な学習や活動がたくさんあっても、それが ESD として取り組まれてこなかった最大の理由はなにか。それは、取組みが単発のイベントや活動として終わってしまい、学習プログラム、学習カリキュラムとして継続的に発展していくソフトやしくみをもたなかったことでしょう。

その意味で、気仙沼市教育委員会の発行した『気仙沼市環境教育 ESD カリキュラムガイド』（2008 年 2 月 15 日発行）は画期的なガイドブックです（ただし、これは学校教育の視点からみたものなので地域全体のカリキュラムガイドが俟たれる）。

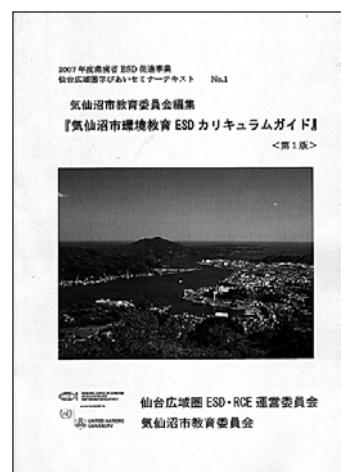
以下にそのエッセンスを紹介しましょう。

「各教科の教科横断型の環境学習だけでは、環境教育としてのストーリー性や系統性を確保することは難しい（中略）（ストーリー性や系統性を保障したカリキュラムの開発）実現するステージ（領域）となるのが、総合的な学習及び生活科であり、これを基軸として各教科との関連を図りながら系統的な環境教育のカリキュラムを開発することが求められている」（『ガイド』28 ページ）

その開発の視点として 4 つあげられています。

【視点 1】発達段階に応じた体系的な環境教育カリキュラムの開発

- 環境教育で育成すべき資質・能力の段階と定義
- 発達段階に応じた資質・能力の育成～発達段階能力マトリックス
- 小学校・中学校・高等学校をとおした系統的な環境教育の実践



『気仙沼市環境教育
ESD カリキュラムガイド』

【視点 2】地域に根ざした探求型学習プログラムの作成

- 気仙沼市における環境教育素材の活用
- 地域および専門機関などとの連携の構築

【視点 3】海外との連携・交流による国際環境教育の推進

- 米国テキサス州の学校との連携
- ユネスコ協同学校のネットワークを活用した情報の共有や国際交流

【視点 4】ICT や英語を活用したコミュニケーション型環境教育の展開

- インターネットテレビ会議、デジタルコンテンツなどを活用した環境学習
- 英語でのコミュニケーション活動をとおした環境教育

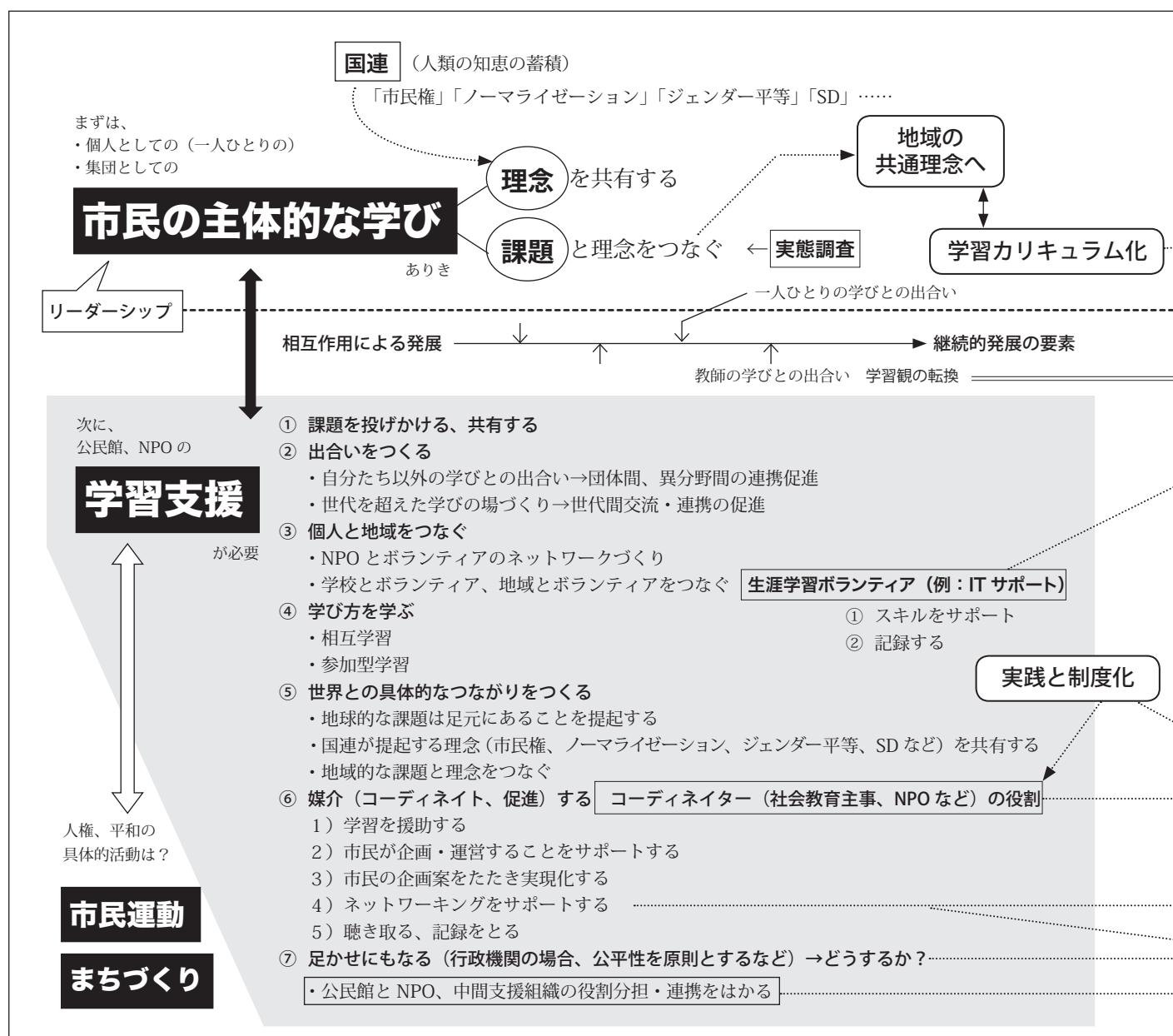


図 市民の主体的な学びと公共的学習支援の相互作成による学習の発展

発展への課題

- ① 地域とつながって子どもの未来はどうなるかを考える
- ② 地域を知ることのカリキュラム化
- ③ 「環境」だけではおさまらない
→総合学習のカリキュラムの見直し

→ 次世代リーダーシップの育成

学校の学びの変革

- ・小中学生の地域行事への参加
- ・地域人材の活用

→ 次世代コーディネーターの育成

→ もっと広げる

→ 学びのネットワークづくり

現在、板橋では「板橋学習」が提案されています。2008年6月からは、複数の担い手により「いたばし学習新聞」が共同発行される予定です。板橋学習をなぜやるのか。いくつかの目的があります。

- 1) 持続可能な板橋を探求する
- 2) 板橋をよく知る
- 3) 板橋に参加する力を高める
- 4) どこにだれがいるかを知る
- 5) 使える資源はなにかをつかむ
- 6) 板橋の地域課題を知る
- 7) 地域カリキュラムをつくる

なにを学ぶのかもいろいろあります。

- a) 水と緑のネットワーク（暮らしの土台）
- b) 郷土史（産業、道路、交通、暮らし、自治、戦争と平和など）
- c) 福祉
- d) 在日外国人

また、このような学習を保障するしくみも必要になってきます。現在、板橋の学習の場では、〈教育自治を実現する「地域教育計画」をつくる〉ということが検討されはじめています。その目標は3つあります。

- 1) 学習者主体だからこそ「地域教育計画」への展開を可能にする教育実践（=子どもを地域の主体にする教育活動）を提起する。
- 2) 国策などで右往左往するのではなく、教育委員会がセンターなどの地域住民の生活課題を踏まえた実践、教員の地域を意識した取組みを掘り起こし、交流させる機能を設け、授業に活かせる機関を設ける。
- 3) そうしたことを支援し、調整することが、基礎的自治体の民主的な教育行政制度の教育委員会であることを宣言する。

これらは、まだはじまったばかりの試みにすぎません。しかし、ここには、学校や地域での学びの蓄積をもとに、学習自体を持続的に発展させていくという強い意思をみてとることができます。もちろんそのゴールは「○○という持続可能な社会」「△△という持続可能な地域」です（○○、△△には地名が入る）。

2年目の シナリオづくりプロジェクト

ESD 分野連携ワークショップとは

■シナリオづくりプロジェクトの経緯とねらい

ESD-J では、地域ネットワーク、政策提言、情報共有、国際ネットワークの 4 つ柱で ESD を推進しています。そのうちの一つ、地域ネットワーク・プロジェクトでは、過去 4 年間にわたり、さまざまな団体に呼びかけて「地域ミーティング」を 40 地域で実施してきました。

2006 度からは、「地域ミーティング」の継続実施のほかに「ESD シナリオづくりプロジェクト」を立ちあげ、多分野の専門家による横断的なワークショップ（以下、WS と略）を 5 回開催しました。この WS を経て、ESD シナリオづくり WS 「3 回パッケージ・プログラム」（以下、「パッケージ・プログラム」という）を開発しました。

このパッケージは、ESD の学びをはじめようとしている地域を対象に、まずはスターター・セットとしてとりわけ分野を連携して活動をするきっかけを提供し、ESD 活動の拡大とネットワークづくりが、一層多くの地域において展開されることをねらいとして開発されました。

■本年度のプロジェクトの位置づけ

本年度は、シナリオづくりプロジェクト 3 カ年の 2 年目にあたり、プロジェクト・パートナー（＝昨年度のシナリオづくり WS 参加者）から推薦されたモデル地域において、パッケージ・プログラムを実施してみるという位置づけとしました。



【シナリオづくりプロジェクト 3 カ年計画】

■期待される成果

- 実施地域に期待**
 - ・ワークショップを経て、次年度以降、地域で取り組むプロジェクトやプログラムを創出します（できればその企画を地域で実践します）
 - ・実際に導入工程で浮上した課題、工夫した内容などのレポートを期待します

- 事務局として期待**
 - ・分野連携の取組みをはじめようとしたとき、どのような課題があるのかを把握します
 - ・全国組織同士の連携・支援モデルとして、今後の各地での支援体制のあり方の検討材料を集めます

■進行スケジュールとフロー

2007年9月13日に第1回プロジェクト・パートナー会議を開催し、昨年度開発したパッケージ・プログラムを、パイロット・プログラムとして実施してくれそうな都市とキーパーソンの候補をあげていきました。会議後に、プロジェクト・パートナーが窓口となって、事務局とキーパーソンとをつなぎ、パイロット・プログラムの依頼を行いました。

その結果、ご多忙のなか、快くモデルを引き受けくださった栃木県宇都宮市、愛知県豊田市、兵庫県神戸市の3都市でパッケージ・プログラムを実施することができました。

アプローチしてから履行契約期間までの余裕がなく、引き受けてくれた地域の担当者には、非常に無理をお願いすることとなりましたが、当初の予定どおり、3月2週目には3都市すべてでWSを完了することができました。

年度末の2008年3月24日に、第2回プロジェクト・パートナー会議を開催し、3都市で実施した成果報告を行いました。

表 ESD 分野連携 WS 年間スケジュール

対象	2007年8月	9月	10月	11月	12月	2008年1月	2月	3月
プロジェクト・パートナー会議		●						●
宇都宮市 WS				→				
豊田市 WS				→				
神戸市 WS				---	---	→		

[宇都宮市ワークショップ] 持続可能な「うつのみや」をみんなで考えよう!

もっとも早くモデル都市が決定したのが、過去に「ESD 地域ミーティング(2005 年 2 月)」を実施した宇都宮大学教育学部・陣内雄次教授を中心とした「循環型社会形成共同研究チーム」でした。大学のスケジュール上、受験シーズンがはじまってしまうと引き受けることができないということで、話が決まった 11 月からわずかひと月の準備期間で「ESD グループ」の構成、呼びかけ、WS(12 月 16 日、23 日)まで運んでいただきました。



ファシリテーター：陣内教授
「カフェ・コモン」マスター

■プログラムの概要

宇都宮市で実施するにあたり、「ESD」を全面に打ちだすと参加者が期待できないことから、基本テーマを『持続可能な「うつのみや」をみんなで考えよう!』とした。以下のプログラムで分野連携 WS を実施した。

セッション 1 「未知との遭遇 ^^; 異分野の方々との交流会」

日時：2007 年 12 月 16 日 10:00 ~ 12:00 会場：宇都宮大学 大学会館トークルーム

1) オリエンテーション

今回の主旨説明、プログラム説明など、ESD について

2) 私を知ってね他己紹介

1 二人ペアになり、相手の似顔絵を描く。

2 相手の氏名、これまでの経験、思い、理念、手法などを似顔絵の周りに書き込む。

3 次に、その紙をもって相手を紹介する。

4 紹介が終わった順に張りだしていく。



他己紹介のようす

3) 質問タイム

1 張りだした自己紹介シートを各人がみて回りながら、付箋に質問を書き貼っていく。

2 次に、各人がそれに答えながら理解を深める。

セッション 2 「持続可能なうつのみやってなに？（ビジョンづくり）」そして「それを阻むものとは？」

日時：2007 年 12 月 16 日 13:00 ~ 15:30 会場：宇都宮大学 大学会館トークルーム

1) オリエンテーション

2) グループワーク：KJ 法でビジョンづくりと発表

「持続可能な宇都宮とは（ビジョン）」を、A と B の 2 チームに分かれてブレインストーミングを行い、KJ 法を用いて整理した。

「持続可能な宇都宮とは（ビジョン）」導き出されたキーワード

- | | |
|---------|--|
| 【チーム A】 | ・器と人 器：産業と都市計画、身近な自然、安全、安心、楽しく、交通も環境負荷を小さく
人：人材教育、地域ぐるみで、産官学の連携 |
| | ・ライフスタイル：スローライフ、地産地消 |
| | ・住民意識、地域福祉への意識、国際教育、国際理解 |
| | ・「ほっと（HOT）する宇都宮」 |

- 【チーム B】
- ・安心安全なまちづくり
 - ・財政的基盤も
 - ・仕事があり人が住み続けるには、財政基盤も重要
 - ・税収がよりよく活かされる
 - ・住民の意識も重要
 - ・福祉の視点も。ユニバーサルな考え方。人の心もユニバーサルに
 - ・地域で子育てをする
 - ・多面的な学習プログラム
 - ・ライフラインとしての、防災体制、医療体制
 - ・交通渋滞など交通問題の改善
 - 「文化花咲くわくわくする宇都宮」→情報発信
 - ・地域性を活かした環境都市としての取組みを
 - ・住民が持続的に参画できるしくみづくり
 - ・行政のコーディネーターとしての役割
 - ・わくわくする地域活動
 - ・カギは地域住民の意識と行動



3) グループワーク：KJ 法で阻害要因まとめと発表

先に発表したビジョンを達成する阻害要因となるものについて、A、B チームに分かれて、再びブレインストーミングを行ない、KJ 法で整理した。

ビジョン達成の阻害要因

- 【チーム A】……教育の問題（人づくりの観点から）

- 教員自身に関する問題 多忙、余裕がない、教師志望者の減少
教師の上からの目線
教師の情報不足（ESD も知らないのでは）
- 学校 学校そのもののことを市民が知らない
学校に求めすぎる
- 保護者 保護者の学校教育への価値観
- その他 学歴社会→ ESD なんてできない
地域→学校だけではない部分での教育が必要だが……
企業→ CSR
国民→意識が低い
- 学校と各セクターとの連携が重要

- 【チーム B】……住民参加とコミュニティの創造

- 住民 意識が低い、任せ、行政に依存するだけ。ボランティアへの評価は「ひま人ね ^;」
- コミュニティ 自治会の体質、体制、高齢化、保守的、人材刷新されない
- 学校関係 児童生徒が忙しすぎて時間がない。地域活動できない
- 行政関係 縦割りが一番の弊害
情報が住民に浸透していない
- 個人 個人の意識が低い
利害関係があつて身動きできない
個人の創造性乏しい

4) 本日のふりかえりとセッション 3 および次回までの課題について

次回までの課題：持続可能な宇都宮を実現するために私ができること、私が活動しているグループができること、をワークシートに整理してくる。

セッション3

「持続可能な宇都宮を実現していくには？ Designing Our Road Map for Sustainable Utsunomiya (私ができること、私たちができること)」

日時：2007年12月23日9:30～12:00 会場：宇都宮大学 大学会館トークルーム

1) オリエンテーション

2) 私たちが連携してできることって？

分野連携し、阻害要因を解決しつつ、持続可能な宇都宮を実現するには？



- ①私ができることは
- ②私が活動しているグループ、団体ができるることは
- ③どうすれば異分野が連携できるのか
- ④異分野が連携してできることは



ともに学びあう人を育てるという視点が基本



本セッションの結果をいかに次のステップへつなげていくのか？

3) 全体のふりかえり

出されたアイディア

- 繼続した情報の交流
- 連携でのメリットはなにか? ⇒ WinWin の関係
- たとえば、市民活動助成で「連携」というキーワードで
- たとえば、2つのグループでの深い議論を（大谷石研究会×雷都レール→ WinWin）
- お互いのグループを理解する機会を。新しい方向性、アイディアがみえてくる



前回の課題シートを参考に議論

■課題の抽出、工夫した内容

実施上の課題と今後にむけて

①準備期と実施体制

今回、準備期間が短かったこと、事務局を担った循環型社会形成共同研究チーム ESD グループも多忙な人が多く、時間を割ける人が実質 2 人と、十分な体制を組むことができなかった。

このような取組みを実施するには、十分な準備期間を設け、ESD-J との十分な打ち合わせおよび調整が必須である。そのためには、前年度から準備にとりかかるのが理想的である。

実施体制としては、右上図のような、当該地域での実行委員会形式が望ましいと考える。そのことにより、多分野からの積極的な参加が期待でき、目的を共有でき、議論が深まるからである。

②参加者について

ワークショップの参加者については、参加者の数が問題ではなく、その質と意欲と多様性が重要である。し

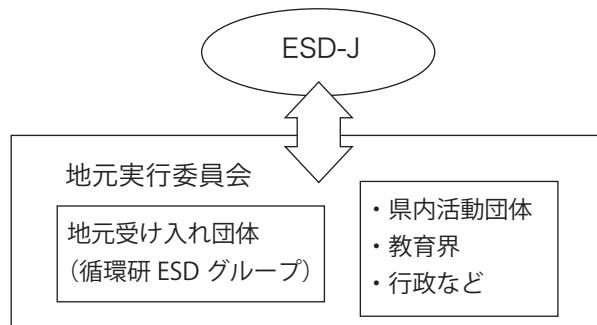


図 実施体制の例

かし、分野はなんであれ活動に熱心な方々はいずれも多忙であり、3回連続で参加することはむずかしい。このため、繰り返しになるが、十分準備期間と実行委員会形式で取り組むことが重要と考える。

■工夫した内容

①共有できるテーマ設定

ESDは、栃木県内では、まだ馴染みがないため、問題意識を共有化しやすくするため、「持続可能な宇都宮」という基本テーマを設定した。

②雰囲気づくり

いきなり本題に入っても知らない者同士の集まりなので、なかなか議論は深まらない。このため、最初にそれぞれの自己紹介の時間（自己紹介）を十分にもつようにした。

③課題とワークシート

第2回から第3回まで一週間あったため、ワークシート「持続可能な宇都宮を実現するために、私ができること、私が所属しているグループができること」を配布し、各人で検討してもらった。第3回はそのワークシートがあったため、議論がスムーズであった。

④ノートパソコン+スクリーンによるまとめとふりかえり

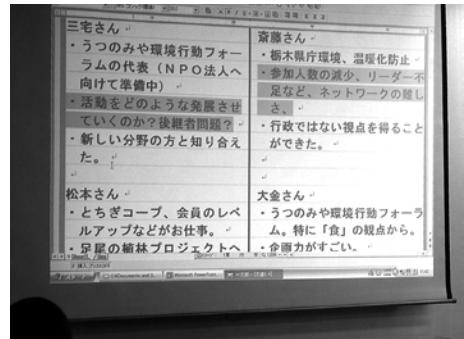
各グループワークの発表や個人の発言内容は、極力、即時にノートパソコンに入力、スクリーンに映し出し、参加者全員で確認・共有するようにした。

⑤グループワーク

やはり、議論を深めるためにはグループワークが適していることが再確認できた。



ノートPCに即時入力



スクリーンに映して共有化

■今後むけて

今回の分野連携ワークショップの成果は、第3回（最終回）に参加者より「このような取組みが継続して必要だ」という強い要望があったことである。

その理由としては、以下があげられた。

- ① それぞれのグループでのアプローチの仕方、得意分野、得意技を明らかにするなかに糸口があり、そこから行政との協働も可能になる。
- ② 活動成果を集めて、互いに検証しあうことが重要である。
- ③ 他のグループと連携することによって、ちがう視点からのアプローチが可能となる。

今後、循環型社会形成共同研究チーム ESD グループに課せられた宿題は、今回の課題と成果を参考にしつつ、分野連携ワークショップを継続するとともに、栃木県内の ESD 実践の環を広げていく体制づくりと ESD の実践である。

(宇都宮市 WS 報告：宇都宮大学教育学部教授 陣内雄次)

【豊田市ワークショップ】 分野を超えて、新・プログラムをつくってみよう！

豊田市 WS では、関係者による体制づくり・準備期間を十分にとることができたため、30 名を超す参加者に恵まれました。開催間隔も 2 週間おきに 3 回（2008 年 1 月 21 日、2 月 4 日、2 月 18 日）とゆとりのスケジューリングで、実施の度に反省・立て直しを図りながら、非常にていねいにすすめていきました。

3 回 WS の後、メーリングリストを構築し、継続した関係を維持していくと同時に、生みだされた「小さなシナリオ」の地域展開の準備に入っています。



企画の段階から引っ張ってきた守随さん（左中央）、坂本さん（右手前）

■プログラムの概要

セッション 1

「お互いの活動を紹介しながら、ESD との接点を探る」

日時：2008 年 1 月 21 日（月）18：30～21：30 会場：とよた市民活動センター 出席者：31 名

1) あいさつ・オリエンテーション

呼びかけ人より、目的、開催までの経緯の説明

2) アイスブレイク

近くに住んでいると思う順に輪になって並び、ごく簡単に自己紹介

誕生日の早い順に並び、誕生日を発表。1 月生まれの方に「おめでとう」

3) 講義「ESD ってなんだろう？」

バレンタインデーが近いため、チョコレートを例に ESD の説明

4) ワークショップ「お互いを知ろう」

「自分の活動」と「ESD ワークショップへの期待」を各自 2 分で発表

輪になって座り、A3 フリップに書いたものをみせながら実施

5) ESD ワークショップへの期待整理

4) で書いた「期待」が似ている人を探して 4 つのチームをつくった
ESD-T の 4 文字を頭文字にして、それぞれのチームで期待を文章化
し発表

E：E でつながる

S：自然と人の接点を、ここからスタート

D：どうして？ と思うところから

T：とりあえず、私たちを知ってください

6) まとめ



ファシリテーター三矢さん



「お互いを知ろう」のようす

セッション2**「お互いがもっている ESD の種を探し、ESD につながる大きなシナリオをつくる」**

日時：2008年2月4日（月）18：30～21：30 会場：とよた市民活動センター 出席者：27名

1) あいさつ・オリエンテーション

前回のふりかえり、初参加者の紹介、本日のプログラム紹介



2) アイスブレイク

笛で吹かれた数の人数のチームをつくり、お互いに自己紹介

3) 自分史からはじめる ESD ワークショップ

二人一組の相互インタビューゲームにより、下記項目を聞きます

- ESD 的な活動に取り組みはじめたきっかけ（ターニングポイント）
- その人がもっている「ESD の種」（活動のための資源）
- 10 年後の豊田をこんなふうにしたい（ビジョン）

A3 用紙にインタビュー結果をまとめた

4) 大きなシナリオ・チャートづくり

インタビューゲームの結果報告（他己紹介）

「ESD の種」を人・場所・物・お金・情報などに分類し、資源マップを作成
ビジョンを一覧表にして貼りだした

5) とよた ESD 活動を展望する（大きなシナリオづくり）

「ぜひと一緒にしたい」ビジョンに投票

ビジョンから、大きなシナリオグループ（テーマ）を 5 つ作成

- 子どももお年よりも外国人も集えるサロンづくり
- 子ども市民活動センターづくり
- 不登校の子どもが受け止められる社会にむけて
- 過密人工林、放棄された田んぼや畑の再生にむけて
- 子どもに感動を与える

どのシナリオグループに参加するか、意思表明



6) まとめ

セッション3**「知恵と技をだしあって、ESD を広げる連携プログラムをつくる」**

2008年2月18日（月）18：30～21：30 会場：とよた市民活動センター 出席者：28名

1) あいさつ・オリエンテーション

前回のふりかえり、本日のプログラム紹介

シナリオ選択上の条件の提示

- 知恵をだしあうため、継続を前提としない

どのシナリオグループに参加するか意思表明し、4 つのグループが決定

2) 私が考える ESD プログラム

グループ内で、3 分でメモ書きして、1 分ずつスピーチ

3) 連携プログラムのづくり

グループ内の ESD の種を確認し、イメージをふくらませた
はじめの一歩になる連携プログラムの試作

○成果目標の共有（10 年のなかの今年）

○いつ、どこで、だれが

○時間、内容、担当者、準備物の役割分担

4) グループワークの結果発表と今後に向けた全体討議

各グループ 3 分ずつ発表（プログラムの内容は 87 ページ参照）

今後にむけた全体討議

5) まとめ

メーリングリスト参加呼びかけ、懇親会の参加呼びかけ



■課題・改善事項の報告および必要と思われる支援等

No.	課題だった点	工夫した点	必要と思われる支援・しくみ
1	<ul style="list-style-type: none"> ・実行委員と参加者の関係 <ul style="list-style-type: none"> ○WS 内で権力をもたず、一参加者として参加できるか ○WS 後にも対等で良好な関係を続けられるか 	<ul style="list-style-type: none"> ・外部ファシリテータの採用 	<ul style="list-style-type: none"> ・開催地域周辺の有能なファシリテータの紹介・斡旋
2	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の確保 	<ul style="list-style-type: none"> ・顔のみえるつながりによる参加呼びかけ 	
3	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の負担（退社後に WS に参加） 	<ul style="list-style-type: none"> ・公共施設の休日の多い月曜日の夜に開催 ・時間を 30 分短縮し、各回 3 時間にした 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備会、事前ミーティングおよび WS1 回分の ESD-J スタッフ派遣はおおいに有効なので、続けるべき
4	<ul style="list-style-type: none"> ・（暫定）事務局の負担（3 回が限界） 	<ul style="list-style-type: none"> ・外部ファシリテータの採用 	
5	<ul style="list-style-type: none"> ・どのシナリオグループに参加するか選択するさいに、参加者が選べずに混乱した 	<ul style="list-style-type: none"> ・混乱のさい、その場で無理にまとめるよとせず、自由に意見をだしあった ・実行委員も一参加者として対等に意見をだした ・ファシリテータは決定に関与せず、進行役に徹した ・混乱への対処は、実行委員がもち帰り、次回再提示することとした 	
6	<ul style="list-style-type: none"> ・できあがった連携プログラムの実践 		<ul style="list-style-type: none"> ・実践のための（金銭）支援があれば、実践率が向上するのではないか
7	<ul style="list-style-type: none"> ・企業の巻き込み（今回、参加呼びかけせず） 		<ul style="list-style-type: none"> ・企業が参加しやすくなるよう、メリットを明確化する

■生み出された「ESD を広げる連携プログラム」

<p>テーマ 子ども市民活動センター</p> <hr/> <p>タイトル 君がつくるまち</p> <hr/> <p>対象 子ども</p> <p>日時 8月23日・24日 9:00～16:00</p> <p>場所 環境学習施設 eco-T</p> <hr/> <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> まちってなんだ? ・しくみ・まち学習 ・住民登録のメリット、デメリット 働くこと・稼ぐこと学習 ・14歳の君たちへ ・農・工の体験 フィールドワーク ・まち歩き、ひみつの場所 わたしたちのまちMAP ・将来のまちオープン 	<p>テーマ 過密人工林、放棄された田んぼ や畑の再生</p> <hr/> <p>タイトル 山の学校「入学式」</p> <hr/> <p>対象 素人ファミリー</p> <p>日時 5月5日 9:00～15:00</p> <p>場所 メンバーの個人所有林</p> <hr/> <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 山知り体験ウォーク ・遊びながら山を知る 食材探し・材料探し 昼食づくり「春の山を食べよう」 ・はし、食器づくり ・屋外調理 地元の高齢者による「山の昔話」 お土産づくり ・植物を使った工作
<p>テーマ 不登校の子どもが受け止められる社会</p> <hr/> <p>タイトル 大人の生き方を見直すことから WS</p> <hr/> <p>対象 不登校の子どもの親・大人</p> <p>日時 6月8日 10:30～12:30</p> <p>場所 とよた市民活動センター</p> <hr/> <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> アイスブレイク ・みんなちがうね、を確認 体験談を聞こう 自助グループのルール説明 ・Self-Help 思いを話すワークショップ ・一人2分トークを2周 ・聞く人は聞くに徹する 生き方の多様性を知る I'm not OK. You're not OK. But, It's OK. 	<p>テーマ 子どもに感動</p> <hr/> <p>タイトル できたらいいなプロジェクト (夢の実現)</p> <hr/> <p>対象 子ども</p> <p>日時 平成20～21年度</p> <p>場所</p> <hr/> <p>内容</p> <p>1年目</p> <ul style="list-style-type: none"> 夢探し期間（夢探しの環境や機会） ・自由に使える空間 ・異文化体験、非日常体験 ・ものづくりに挑戦 <p>夢の発表会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きな舞台で発表 <p>2年目</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもが自分で夢を考える ・夢をかなえるプロをコーディネート

(豊田市WS報告：とよたESDワークショップ実行委員会)

[神戸市ワークショップ] ESD ワークショップ in KOBE

12月になってやっと企画が確定したモデル都市が神戸でした。神戸大学大学院人間発達環境学研究科・松岡広路教授を中心とした院生たちと、パートナーのボーイスカウトの強い絆とバックアップによって、なんとか年度末にワークショップ（2008年3月1日、2日）まで運ぶことができました。

ファシリテーターを担ってくれた院生2人、富永貴公さん、萩原久美子さん（ともに神戸大学）は、はじめての経験にもかかわらず、松岡先生の指導のもと、みごとに2日間のファシリテーションを果たしてくれました。

このWSの実践内容はアクションサーチ論文としてとりまとめ、紀要へ掲載される予定です。



駆けつけてくれた松岡教授

■プログラムの概要

参加者のさまざまな「経験」や持続可能な社会にむけた「思い」からESDという大きな目的にいたるまでの多様な流れ（大きなシナリオ）を描き、これを共有しながら、各分野が蓄積してきた理念、方法、対象などをつないで、地域で展開できる新しいプログラム（小さなシナリオ）を考えることをねらいとした。

セッション1

① ESDってなんだろう？& お互いを知ろう！

日時：2008年3月1日（土）13:00～16:00 会場：こうべ市民福祉交流センター 出席者：15名

- 1) オリエンテーション
- 2) ESDへの導入講座「ESDってなんだろう？」
- 3) アイスブレーク（自己紹介とグループづくり）
 - 口に2画足してできる漢字ができるだけあげる
 - はじめて会う人と見比べて、ないものを足す
- 4) ESDシナリオづくりをする前に「お互いを知ろう！」
 - 即席フリップチャートを使ったトークセッション
 - 各自記入、Q1～Q5を全員で順番に発表
- 5) グループづくりゲーム
 - 連想ゲーム「卒業式といえば？」
 - 思い浮かんだものが類似した人同士で集まる
- 6) ESDシナリオ・WSへの期待整理
 - 参加者が「この場」に求めることについて各グループで発表
 - 各班まとめて、全体にフィードバック

セッション2**② ESDにつながる「大きなシナリオ」づくり**

日時：2008年3月1日（土）16:00～18:00、3月2日（日）9:40～11:20

会場：こうべ市民福祉交流センター 出席者：15名

1)「自分史からはじめる ESDとの出会いグループワーク」1

ワークシート1を配布し、「ヒント集フォーマット」を参考にしながら、個人で2014年までの自分のシナリオをつくるためのメモを作成

2)「自分史からはじめる ESDとの出会いグループワーク」2

グループ内で発表。聞いている者は、ワークシート2を記入しながら聞き、質問をする。
記入したワークシート2を発表者に渡す

3) 今日のまとめと明日の連絡

本日の振り返りおよび、明日はワークシート2をもとに活動を行うことを告げる
(1日目終了)

4) オリエンテーション

前日のふりかえり

5)「ESDにつながる大きなシナリオ・チャートづくり」

フィードバックされたワークシート2を用い、ワークシートの表頭項目「I. 原体験」「II. ○○教育との出会い」「III. ESDとの出会い」「IV. 2015年のESD・私の夢」それぞれについて要点をピックアップ。4色のポストイットに記入。氏名も記入

各フェーズごとにポストイットを集める。4グループに分かれ、模造紙を使って整理、構造化する

6) 大きなシナリオ各フェーズの発表と共有化

整理したチャートを発表、4枚をドッキングして貼りだし、全体像の確認

7) 大きなシナリオをもとに話しあおう

III.、IV.に関して自分が共感できると思う項目に黄シールを貼る

I. I.に関してもっと知りたいと思うものに赤シールを貼る

セッション3**③ ESDを広げる「小さなシナリオ」づくり**

日時：2008年3月2日（日）11:30～16:30 会場：こうべ市民福祉交流センター 出席者：15名

1)「小さなシナリオづくり」にむけた試作チームづくり

II.に注目して関心をもった人のところへ行ってインタビュー

IV.に注目して、価値観を共有できそうな人のところへ行って相互インタビュー

IV.のシールに従ってグループ分け

2) 小さなシナリオ試作チームで作戦会議

グループで新しいプログラムの目標、対象、手法などの組みあわせを相談

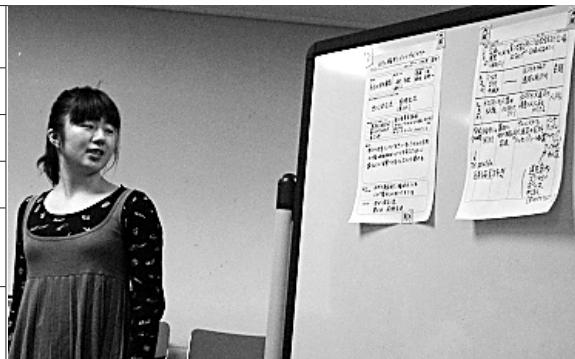
発表用のワークシート（A3に拡大したもの）に記入、壁に掲示。発表後は自由にみて回る

3) ワークショップ評価 & 今後に向けた話し合い

4) まとめ

■生みだされたプログラム（案）

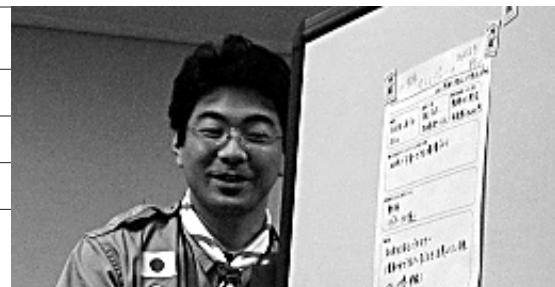
タイトル	街の縁側づくりプロジェクト	
領域	多文化共生教育	
対象・人数	一般（通行人）・多数	
役割	世代間交流、国際交流（異文化）	
目標	行為目標	<ul style="list-style-type: none"> 元町の商店街に縁側をつくる 人が集まるしきけをつくる
	成果目標	<ul style="list-style-type: none"> 世代間交流 異文化、国際交流
内容	<ul style="list-style-type: none"> 街の縁側として無料で利用できるカフェをメインストリート歩道部分に設置し、地域のご老人や、在日外国人の方たちも気軽に休憩しながら、交流を図れるスペースを提供する 各テーブルには、情報や芸を提供するホストを配置して、一人できた人も楽しめるようにする（サイエンスカフェ・ヘブンアーチスト） ファーストフード店などのトレーサーに敷く「メッセージ・シート」をオリジナルで作成し、伝えたいメッセージを掲載する 制服を着た道先案内人兼パトロールが、カフェの周辺を巡回しながら、街行く人たちの世話をする 	



タイトル	ヒューマップ	
領域	地域交流	
対象・人数	地域住民	
役割	地域力の向上	
背景	地域性+世代間交流を目的とした地域力向上プログラムが必要	
目標	行為目標	<ul style="list-style-type: none"> 自分の足で、地域の地図を完成させること。その結果、地域内交流を活性化させるための下地ができる
	成果目標	<ul style="list-style-type: none"> 地域の人、モノ、建物を知る ⇒気軽に声かけ、あいさつできるよう
	<ul style="list-style-type: none"> 20名程度の参加者を募り、5グループに分けて、それぞれテーマ別に設定したルートごとに歩く 気がついたものをポラロイドカメラで撮影したりしながら、白地図に情報を落とし込んでいく ランチは、事前に打合せしておいた一般のお宅へお邪魔して、お味噌汁をご馳走していただく。箸とお椀、おにぎりは本人持参 それぞれの家庭ごとに味や具のちがうお味噌汁を知ったり、人を知る 	



タイトル	マナー戦隊「サトスンジャー」	
領域	社会生活でのモラル	
対象・人数	親、子ども、その場にきている人	
役割	戦隊モノ、悪役、(綺麗な)司会者	
背景	社会生活上でのマナー（電車の中でうるさい子どもを注意しない親、マナーの悪い乗客）	
目標	行為目標	・ 悪に気づく ⇒ 自分のことだと気づく
	成果目標	・ モラルの向上
		<ul style="list-style-type: none"> ・ デパートの屋上ステージを使って、とおを通じて啓発を行う ・ 「怒る」のではなく、「注意」「自分で気づかせる」⇒周りの人にも伝えていく（継続） ・ ストーリー： <ul style="list-style-type: none"> (1) 歌 - マナーの悪い「ヤカラ星人」しづめるぞー♪ (2) 電車でのマナー・失礼な言葉づかい……⇒困る人たち (3) 「おかしいよね？それ」⇒リストバンドが光って、変身！ (4) マナー戦隊「サトスンジャー」登場 (5) 悪いことに気づく



タイトル	神戸マップ～貿易編	
領域	地域を知る	
対象・人数	小学生（高）～高校	
役割	ESD を言葉としてださなくとも ESD になる活動	
背景	地域：神戸市の特徴 ⇒国際都市 ⇒世界とのつながり	
目標	行為目標	・ フィールドワーク、マップづくり
	成果目標	・ 街を知る ⇒ 他国の文化に触れる
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 各家庭にある輸入品を調べる（神戸港：輸入会社など） ・ グループで整理⇒購入した店（スーパーなど）を調べて、マップに落とし込む ・ 原産国を調べる ⇒ 世界地図に落とし込む ・ 留学生や神戸在住の外国人をゲストスピーカーとして呼んで、話を聞く ・ 一緒のところ、ちがうところを確認するゲームを行う



■課題の抽出、工夫した内容のとりまとめ

自己の原経験を他者と共有しあうことをベースとする（むしろ、そのこと自体に第一義をおく）WSは、時間をかけてもかけすぎることはない。そのため2日間という限られた時間内でWSを実施するにあたり、意義を損なわないように、タイムスケジュールを組み直すことに苦心した。

このことから、反省点としては、現実的に、短時間での開催を行わざるを得ない場合、参加者に応じ、強調すべきワークだけをとりだして、短縮版のWSを行うのが適切であるように考えた。

（神戸市 WS 報告： 神戸大学大学院 総合人間科学研究科 富永 貴公
神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 萩原久美子）

■ ESD ワークショップ in KOBE 参加者の声 アンケートより

Q1. プロジェクト開始当初、プロジェクトに期待したことは……

- ・ ESD とはなにかを知りたい、ESD について見識を深める
- ・ 他団体、他分野の方々との交流、新しい人とのつながり、絆、出会い
- ・ 意見交換を通じて自分の活動に活かせる情報を得ること

Q2. ワークショップを終えて、その期待はどれくらい満足しましたか？

- ・ 期待どおり、もしくは以上だったこと
- ・ ESD は姿・形がないことがわかった。ESD を意識しなくても ESD ができる確信
- ・ 交流により、刺激を受けた。新しい視点にたくさん気づくことができた
- ・ 自分の意見を発表するなかで新しい発見がありました
- ・ 期待にそぐわなかったこと
- ・ ESD というものが一人歩きをしていて、教育なのかアクションなのか、概念なのかわからない。はつきりした答えがでていないこと
- ・ 人との交流がもう少し多くてもよかった

Q3. ワークショップの進行方法について、ご意見をお聞かせください

よかった点

- ・ ワークシート、タイムマネジメントなどすごくよく準備をされている
- ・ グループを何度も変えることで、たくさんの人と話ができた
- ・ 詰め込みすぎず、余白の時間があったのがよかったです

改善すべき点

- ・ ESD の理解を深める必要があると思います
- ・ フェーズ III（聞き書きシート）から IV（展開）へのすすめ方にもう一段階ほしい。たとえば、III が「ESD との出会い・かかわり」という表記のほうが IV につなげやすい

Q4. その他、気づいたこと、メッセージなど

- ・ いい経験になってよかったです
- ・ 若い方々のファシリテータは新鮮ですごくよかったです
- ・ 今回会った人たちと、今回限りの関係になるのは悲しいから、どうしたらいいかな？
- ・ ESD を全面に押しだすのではなく、日々の活動のなかに ESD があると思いました
- ・ 参加者が「自由にいれること」を大切にする姿勢は大事だと思いました

■ その他、報告事項

「ESD とはなにか」を「理解すること」をめざすよりもむしろ、自身の活動、および体験をふりかえり、それにもとづいて ESD として自身の活動を展開することによって得られる自身の活動の課題の克服をめざすことに力点を置いて、「ESD とはなにか」を他領域で活動する人たちとの交流を通じて「体験すること」をめざすということを強調するのが妥当であるように感じた。

ESD 分野連携 WS のまとめ～次年度に向けて

最後に、当初掲げた期待される成果（☞ 73 ページ）に照らしあわせて、パイロット・プロジェクト実施のふりかえりを行って、まとめとしたいと思います。

●実施地域に期待すること1：シナリオを描くこと

すべてのモデル地域において「大きなシナリオ」を共有しながら描くことができました。また、「小さなシナリオ」については、準備期間をかけることのできた豊田市と神戸市で創出することができました。もっとも慎重に体制を整えながら準備をすすめた豊田市では、「小さなシナリオ」の実現にむけた活動が継続しており、そもそもパッケージ・プログラムがねらったとおりの成果を導きだしています。

●実施地域に期待すること2：課題の抽出、工夫をした点についてのレポート

すべてのモデル都市から、3セッションの記録および、課題点、工夫した点をとりまとめたレポートをご提出いただきくことができました。

●事務局として期待すること1：分野連携の取組み開始時の課題把握

宇都宮市のレポートに図式化されているように、パイロット地域に根づいた地元の実行委員会のような体制が必要であること、そして、準備期間を十分かける必要があることが確認されました。

●事務局として期待すること2：今後の全国展開における支援のあり方

本パッケージ・プログラムの提供はもちろんのこと、ESD という概念がまだ浸透していない現段階において、1回目のセッションの導入において「ESD とは？」という講義を入れて説明をすることは、重要と感じました。わからないながらも、参加者へのインプットを行ったうえで3回のセッションを経ることで、体感的に ESD を理解していくというステップが有効であると感じました。

2008 年度は、いただいた貴重な情報を活かして、本パッケージ・プログラムを分野連携 ESD の導入ツールとして汎用的に使えるものにとりまとめた「実践ガイドブック」を作成する予定です。

最後に、ハードスケジュールのなか、パイロット・プログラムにご協力いただいた宇都宮市、豊田市、神戸市の WS にかかわったすべてのみなさまに感謝いたします。

アンケート!

ESD をはじめる、すすめる 地域の期待と課題

ESD-J 理事 地域 PT サブリーダー 新海 洋子

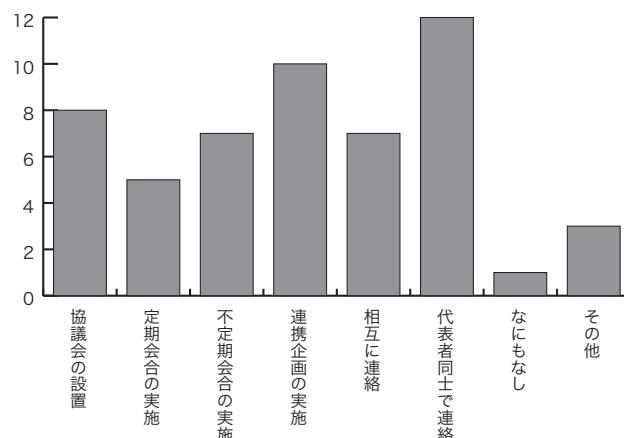
ESD-J は、ESD の理解を促進することや、地域で ESD をすすめるための方向性を議論することを目的に、2003 年から「地域ミーティング」の開催を呼びかけてきました。開催地域はこれまでに 40 を数えます。本アンケート調査は、その後の活動状況を把握するために、40 地域へ発送し、23 票（回収率：58%）の回答をいただきました。

これをもとに、地域ミーティング開催の意義についてふりかえり、地域の課題やニーズから、ESD 推進のあり方を考察しました。

地域ミーティングの意味

Q1. 地域で ESD をすすめるための各団体間でのネットワーク構築状況は？（複数回答可）

協議会の設置	8
定期会合の実施	5
不定期会合の実施	7
連携企画の実施	10
相互に連絡	7
代表者同士で連絡	12
なにもなし	1
その他	3

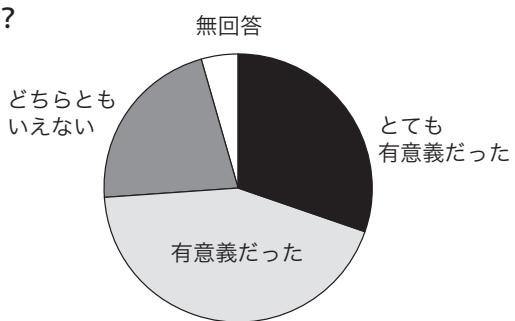


Q2. 地域ミーティング開催以後、地域で開催された ESD に関するおもな取組みは？（一部抜粋）

- ・ 地域がもっと元気になるアイデアを考えるワークショップ
- ・ 「持続可能な福祉を ESD ですすめよう」ミニシンポ
- ・ 砂漠緑化 NGO 「緑の応援団」への資金援助と中学生の砂漠ツアー参加
- ・ ESD& 多文化教育教材づくりセミナー
- ・ 大学の「環境教育・ESD 指導者養成講座」推進体制協力
- ・ 国際交流と環境についてのキャンプ開催
- ・ ESD 指導研修会の開催

Q3. Q1、Q2において地域ミーティングの開催の意義は？

- とても有意義だった 7
- 有意義だった 10
- どちらともいえない 5
- 無回答 1



その理由は？

< とても有意義だったと感じている地域 >

- ・ もともと地域と学校が連携したさまざまな環境学習、平和学習、人権学習が展開されてきましたが、それらが ESD の一環としては関係者に認識されていませんでした。地域ミーティングを開催することにより、環境と開発（国際協力）と人権をつなぐこれらの ESD 的課題に取り組んできた組織と人びとのネットワーク化と総合化が一步前進しました。
- ・ かなり幅広い NPO 関係者や行政関係者に声をかけていたため、その後も、広がりがたよらず、幅広いネットワークを構築するよい機会となった。現在も重層的に広がっている。
- ・ もともと、「世界人権宣言を暮らしのなかに生かす」という理念はすべての課題を含んでいたが、行政中心の組織で、そこに課題別の市民団体を組みあわせて活動課題を深めるという展開がすすみつつある。とくに、環境問題に関する学習会や市民団体との協働が ESD のもとですすんだ。

< 有意義だったと感じている地域 >

- ・ 活動分野を超えた団体間でのつながりができ、地域ミーティング後もそこで議論されたアイデアやイベントを実施することができた。
- ・ 参加者が ESD 的な考え方をするきっかけづくりになり、お互いの共通言語として流通し、既存の活動そのものを見直す視点として位置づけられた。

< どちらともいえないと感じている地域 >

- ・ それぞれお互いが通常の活動で忙しい。持続して活動していくのがむずかしい。
- ・ 参加者にかたより（環境系が多い）があり、全体的な広がりになりにくく。
- ・ 「国連発」にもかかわらず、国は動いていない。市区町村はもとより、都道府県も計画をまったくもっていない。そんななかで、あまりにも個人的な動きとして「地域ミーティング」が行われた。

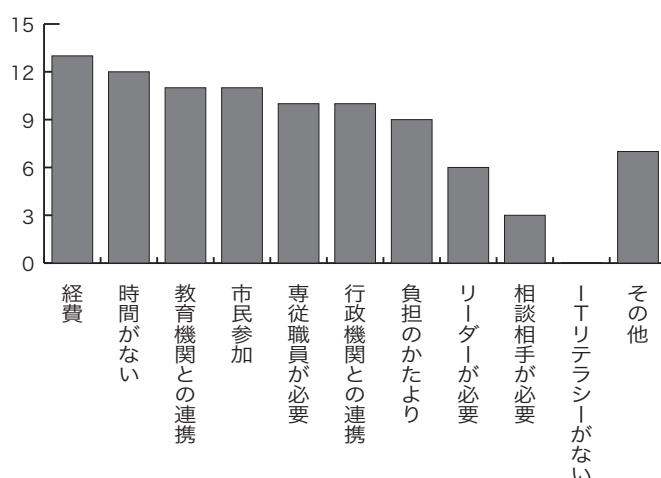
これらの結果から、地域ミーティングの実施により、団体間や団体の代表者間の関係性が深まり、協議会や連携企画なども実施され、地域ミーティングが少なからず地域の人や組織をつなぐ効果があったことがうかがえます。またミーティング開催後、ESD を普及・推進するセミナーやワークショップ、ESD を担う人材育成が数多く展開されていることから、地域のなかでバラバラに動いていた活動が、ESD というキーワードによって集結し、問題意識や課題解決の共通項をみいだすことが、地域の ESD 的な活動の原動力となっていることが確認できました。

しかし一方では、地域の担い手がおかれている多忙な状況や、いかに行政を巻き込み動かすかといった課題も浮かびあがってきました。

地域で ESD をより活性化するためには

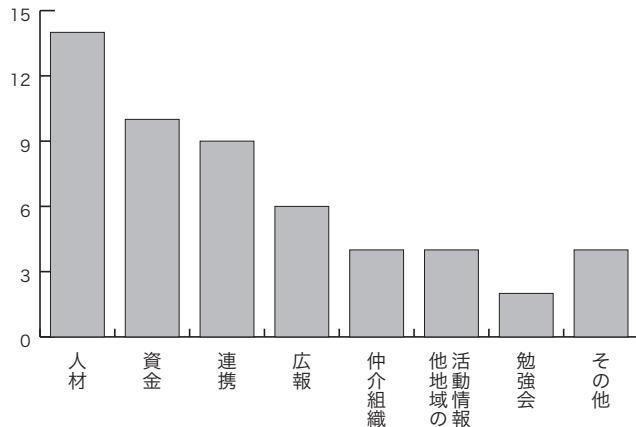
Q4. ESD を地域ですすめていくうえで、お困りの点、改善したいと思っていることは？（複数回答可）

経費	13
時間がない	12
教育機関との連携	11
市民参加	11
専従職員が必要	10
行政機関との連携	10
負担のかたより	9
リーダーが必要	6
相談相手が必要	3
IT リテラシーがない	0
その他	7



Q5. 課題解決のために必要だと思われるものはなに？（複数回答可）

人材	14
資金	10
連携	9
広報	6
仲介組織	4
他地域の活動情報	4
勉強会	2
その他	4



Q6. ESD-J に期待する支援・役割は？（複数回答可）

政府、自治体への提言・しくみづくり	9	地域間交流	4
広報・普及	4	国内外の ESD 情報の提供	4
テキストブックなどの資料作成	3	事例分析・紹介	3
資金的援助	3	人材派遣(アドバイザー・ファシリテーター)	3
ファシリテーターの認定	1	講座・研修の開催	1
その他	2			

地域で ESD をすすめるために、経費、時間、負担のかたより、専従職員の必要性が多くあげられ、同時に、教育機関や行政との連携もあげられました。これらは、時間的・経済的な保障がなければ、多様なセクターと対等に学びのしくみづくりを検討・検証する専門性をもつことがむずかしい、という「地域の課題」を浮き彫りにしています。だからこそ、これらの問題解決のために多くの地域が「人材」をあげているのでしょう。

そのうえで、地域から ESD-J に期待される、政府や自治体への提言・しくみづくりとは、政府や自治体、企業、教育機関などへ積極的に働きかけ、地域の担い手が有償で活動を続けられる「しくみづくり」であるということが明示された思いがします。そして、今後さらに、地域の現状を把握し、地域と役割分担しながら、ESD 推進のための戦略づくりに力を注いでいく必要性を感じました。

地域のESDの動きを共有する「ESD地域ブログ」

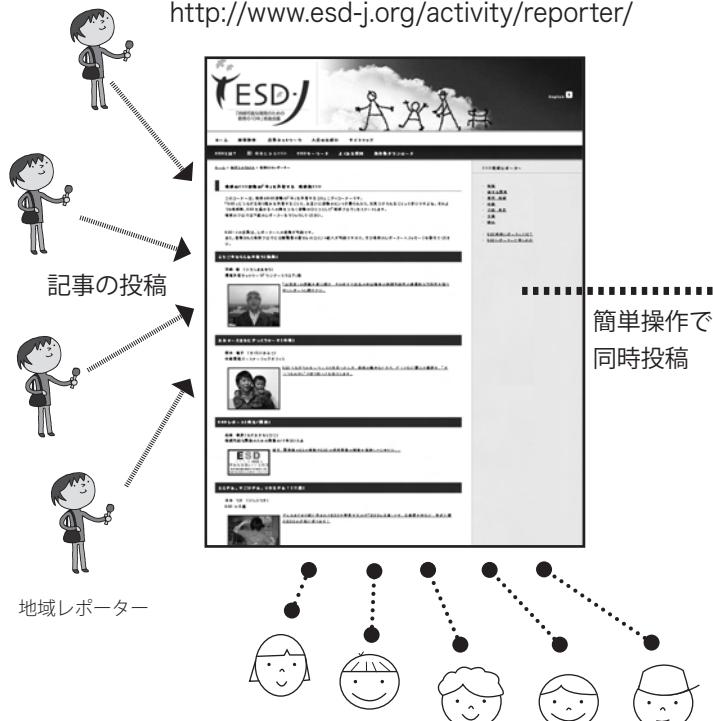
全国でESDを実践する、またはESDを意識しながらさまざまな活動に取り組むESD-Jの会員からは、以前より他の地域の取組みを参考にしたい、地域の動きを共有したい、という要望がありました。しかし地域の動きを共有するような会合を頻繁に開催することはむずかしく、一方会員専用のメーリングリストでは、イベントの開催告知や、ESDに関する議論の場としては活用されるものの、日常的な地域の取組みを報告しづらいという課題がありました。

そこで、地域の動きを気軽に発信し、さらに会員内外のESDに関心を寄せる方々とネット上で地域間が交流をする、ESD地域ブログが2008年2月より実験的に7地域でスタートしました。そのブログでは、7地域のレポーターの方が、ESDにつながる地域の活動のようすをはじめ、活動をすすめるうえで感じたこと、悩んだこと、そのための工夫など、さまざまなESDの実践者の生の声を掲載していただきます。現在、会員へ希望者を募り、地域レポーターの拡大を呼びかけています。

そしてこの「ESD地域ブログ」は6月より、NTTレゾナント社が運用する「環境goo」とコンテンツ連携をスタートし、さらに多くの方へ地域の動きを発信することになりました。

それぞれの地域の「いま」を共有することで、お互いの活動のヒントが得られたり、元気づけられることが多くあります。なかなか忙しく、すべての記事を読むことはできないかもしれません、定期的に地域の動きをウォッチし、地域同士がつながるひとつのツールに育てばと思っています。

ESD-J ウェブサイト ESD 地域ブログ
<http://www.esd-j.org/activity/reporter/>



環境 goo 地域発 ESD
<http://eco.goo.ne.jp/education/esd/>



2008年5月現在のレポーターのみなさん

市嶋 彰さん

環境共有ネットワーク「ワンダースクエア」他多数

- えちご“なじらね”便り

「山古志」の復興を追い続け、そのなかから、日本の中山間地の持続可能性について普遍的な方向性を探りだし、レポートし続けたい。また、新潟には「新潟水俣病」という事件があります。熊本県水俣市に学んで、負の遺産を教訓として地域再生を図っていく「もやい直し」事業が、ここ新潟でもスタートします。私もその実行委員に選定され、ESDの考え方を提案しつつあります。「持続可能な地域を再生させるための開発」に対する学びの場が多数もたれるものと思われます。そのプロセスも克明にレポートしたいと思います。



※なじらねとは“いかがですか？”という新潟の方言

桜井 溫子さん

中部環境パートナーシップオフィス

中部

- おみやーさまにやっとりやーす

2003年に開催された愛知、岐阜、三重の地域ミーティングから5年。さまざまなESDの取組みが展開されています。あなたさまはなにをされていますか（おみやーさまにやっとりやーす）、ということで、ESDつながりのキーワードで出会った人びと、地域の動きなどから、ピンと心に響いた事柄を、“オンコものさし”で切りとてお伝えします。まちなかで育った40代の私が使うなごや弁もまじえて民放っぽくニュアンスが伝わるように心がけたいと思います。

**長岡 素彦さん**

持続可能な開発のための教育の10年さいたま

関東

- ESDレポート

埼玉、関東圏のESの情報やESDの学校教育の情報を発信していきたい。

**石井 りかさん**

ESD in 三重

三重

- ええやん、すごいやん、できるやん！

「ESD」。じつは私たちもその正体がなんなのか、まだ、はっきりわからないんです。なかなかみつけにくいものですが、私たちのすぐそばにESDはたくさん潜んでいて、ときどきその姿をあらわす。そしてそれをみつけた瞬間私たちは、「E：ええやん！、S：すごいやん！、D：できるやん！」と思わず声をあげてしまう！？そんなまだまだ謎に包まれたESDを探索するのが「ESD in 三重」です。三重県を中心に、身近に潜むESDの正体に迫ります！

**塩尻 輝雄さん**

NPO 法人みんなのセンターおむすび

東京
板橋

- おむすび通信

さまざまな立場の人たちのなかでのESD的視点を探りだしたい。共生、持続性、運動といった視点から次世代を育む行動力に着目したい。ESD初心者としてさまざまな人たちと総合的視点で交流し、拠点の必要性をとらえつつ、市民レベルの動きを追いたい。たとえば、「木づかい運動」（ESDレポートvol.6参照）では、〈国内産の木材を使うことでCO₂の削減につながる適正な森林管理ができる〉といったことが書かれているが、そこに生活して毎日を送る人たちにとって、どうすれば生活が潤い林業自体を後継することができるのか、といった意味での〈持続性〉の視点が抜けていた。また、おむすび（NPO法人名）の福祉ショップのなかでESDを柱に据えているが、福祉の分野とESDがどのようにタイアップできるのか、すでにできているのか、ひいては、ESDのなかで障害者、高齢者福祉というものがどのような位置づけになっているのかを見極めていきたい。

**廣瀬 聰夫さん**

NPO 法人ダッシュ

大阪
泉北

- 人権伸張の事業と連携したESD

「ESD泉北」は「世界人権宣言泉北3市1町連絡会」を基礎にし、人権の視点を原点にしています。いろんな要素を含むESDですが、人権の視点を中心とした団体は少ない聞いていますので、「人権のまちづくり」に開発や環境も含めた視点から現地の活動をレポートしたいと思います。また、国のESD行動計画策定時には、「人権教育のための国連10年」のときの政府の対応と比較した議論がありました。その経験やその後の動向についても、ご紹介したいと思います。

**土生 真弘さん**

岡山ユネスコ協会

岡山

- 岡山発！「つなげ古今東西、そして未来」

岡山地域（岡山市とその近隣地域）でのESDの取組みの特徴は、「公民館」を中心とした活動です。そして現在は、公民館のような「学校外教育」の場と「学校教育」「大学」とが連携した形でESDをすすめる挑戦がすすんでおり、そのようすをレポートしていきたいと思います。



ESD地域レポーターはこのような多彩なメンバーでスタートします。また、ESD-Jの地域プロジェクトチームにより、地域ブロック単位のESDの動きも順次公開していく予定です。ESDの地域情報を楽しむに！

私もESD地域レポーターをやってみたい！という方は、ESD-J事務局（admin@esd-j.org）までご一報ください